

10月



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2013年

10月号

No.604

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七竈 ななかまど 鳥兜 とりかぶと 竜胆 りんどう

△表紙の花▽ 櫻子

紅葉した七竈の葉が、斜め後ろからの光を受けて鮮やかに浮かび上がる。

竜胆の純白と鳥兜の優しい青紫色が、七竈の色彩のうつろいを際立たせる。

奥行きのある葉の重なり。伸びやかな花。家にいながらこんな風景を目にできることのなんと贅沢なことだろう。

花を育てる人、大切に届けてくれる人、器をつくる人。永い歴史のなかで培われた豊かな文化。

古の人たちはどんな思いで花をいけていたのだろう。

自然との一体感。

もてなしの気持ち。

木々や草花への敬いの心。

なによりも、器の上でにつこり笑ってくれたように感じられたときの、あの爽やかさ。

うまく言葉にできないけれど、花たちへの感謝をこめて、写真で残しておこう。

花材 七竈 (薔薇科)

鳥兜 (金鳳花科)

竜胆 (竜胆科)

花器 陶花瓶

晒菜升麻 さらしなしきょうま

△2頁の花▽ 櫻子

晒菜升麻はキンポウゲ科の植物で山中の林下に生える。高さが一メートルにもなり、白い花が長いブラシの様に咲く。

若菜を茹でて水に晒して食べるので晒



菜。根の部分は升麻と呼ばれる漢方薬になる。まさに自然の恵みを与えてくれる植物だ。

晒菜升麻と取り合わせた丸葉の木や竜胆を格の高いものにしてくれる。

いけばなとしていける事が第一義なのだと思わせる花だ。

花材 丸葉の木（満作科）

晒菜升麻（金鳳花科）

竜胆（竜胆科）

花器 陶水盤

蒲^{がま} 鶏頭^{けいとう} 菊

△3頁の花▽ 仙溪

鶏頭の鮮やかな赤色。茎が太くて花も不定形で大きい。虫に食べられていない葉がたつぷりついているのは、とても大切に育てられたということ。こんな花をいけられることに感謝である。

蒲は日本全土の池や沼に生え、「古事記」に出てくるほど太古からの馴染みの植物だ。菊も鶏頭も古くから馴染みの花だが、もともと菊は中国、鶏頭はインドの植物。私たちがいけて楽しんでいる花や木の来歴を知ると、世界の国々を身近に感じることができて楽しい。

もし鶏頭が日本に伝わっていなかったら、はたしてどんな花をここにいけていただろう。

花材 蒲（蒲科）

鶏頭（寛科）

菊（菊科）

花器 陶鉢



貝塚伊吹

仙溪

花型 行の花型

花器 煤竹竹筒

「伊吹」は松科・柏槇属（伊吹属または鼠刺属）の常緑高木で、針状の葉を持つ。

生花の稽古には「貝塚伊吹」がよく使われるが、これは伊吹の変種で葉の先は丸みがあつて手に優しい。貝塚伊吹を伊吹と呼んでしまつてゐるので、混同しないように注意したい。

花材となる伊吹の仲間には、立柏槇、這柏槇（磯馴）、杜松（鼠刺、ねず）などがあるが、父は杜松を好んで立花によく使つていた。いかにも仙人が住んでいそうな雰囲気の木である。

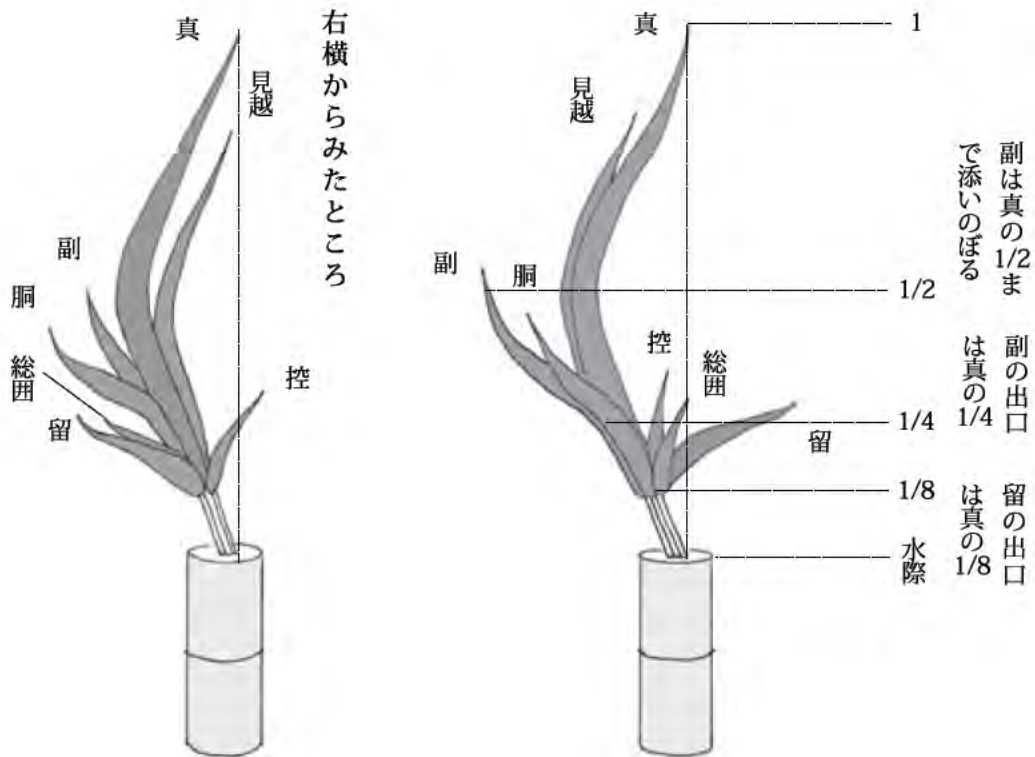
花展には立柏槇や這柏槇を使うことが多いが、手袋をはめていけなくと、痛くていけない。

生花の基本花型の解説にと、貝塚伊吹7本を使つて7体の役枝をつくり、行の花形に付けている。

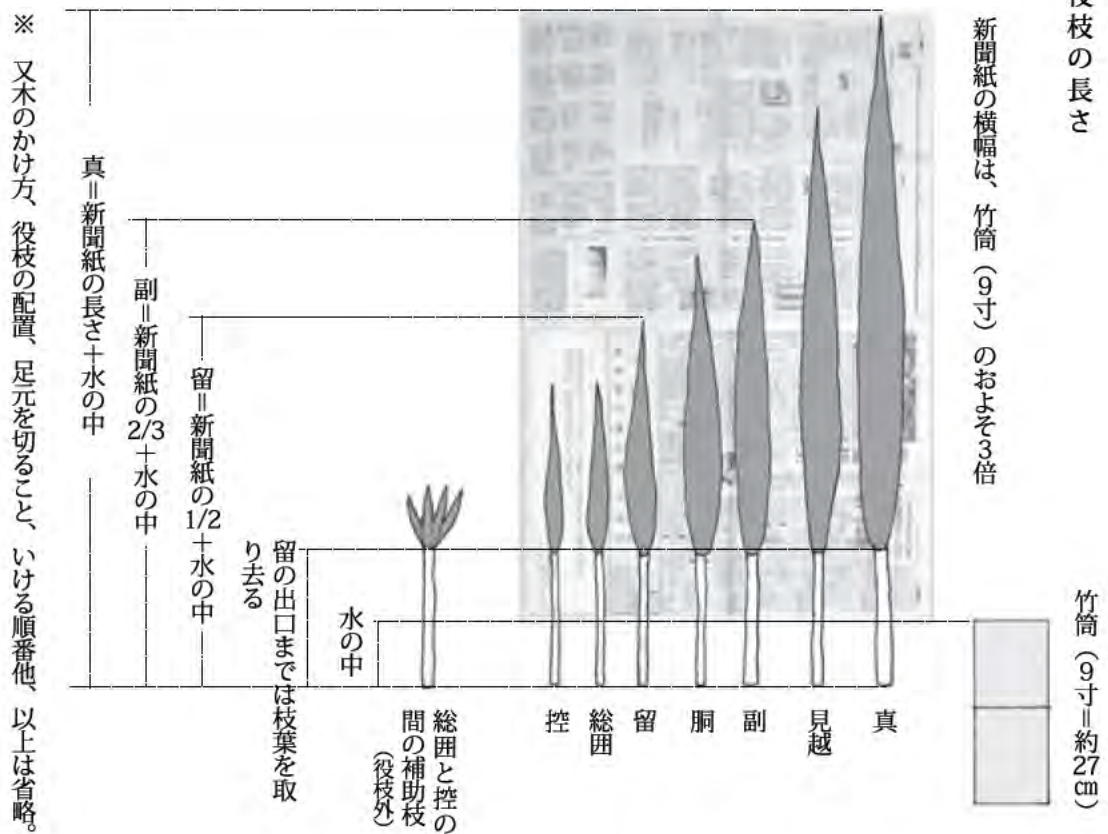
左頁にそれぞれの役枝の長さと形を図解してみたが、あくまでも誰でも解るようにと長さや出口の基本を示しているので、これを基本にしながら花材それぞれの出生や特徴を生かす微妙なさじ加減は先生から随時教わるようにしてほしい。

真の全長を畳（京畳）の幅で測ることができる。（およその目安として）

貝塚伊吹の生花（七体） 行の花型



役枝の長さ



ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」⑤

先月につづいて「ビッグイシュー日本版21号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

逆境を生きのびる術

暑さに強い植物は体を冷やす工夫をし、乾燥地の植物は水分の蒸発を少なくする工夫をし、寒さに強い植物は凍りにくくする工夫をしている。

「夏に育つ植物たちは、私たちが汗をかくのとまったく同じ仕組みで、葉っぱの気孔という穴から水を蒸発させて体を冷やしています。」

「ですが、サボテンなどの多肉植物は乾燥した砂漠地帯出身なので、水の蒸発を防ぎたい。だから、夜の間に気孔から二酸化炭素を取り込み、葉に蓄えて日中の光合成に備え、昼はなるべく気孔を閉じているんです。そうやって水の消費を節約して生きていくんです。」

「寒さ対策は、まず凍らない性質を身につけないといけないんです。ですから、常緑樹なんかは冬に備えて少しづつ少しづつ糖分などをからだに備えていくんですよ。」

「寒い冬を通り越した大根、白菜、キャベツは甘いと言われますよね。ハウスのホウレンソウも出荷前に

一定期間寒風にさらして甘みを増すそうです。栗なんかは冷蔵庫にいれておくとうまくなるんですよ。」

「猛暑が苦手な植物は春に花を咲かせて枯れ、夏はタネという形でやり過ごす。極寒に弱いものは秋に既にタネになっているのです。」

植物は日々の糧を手に入れるために独特の進化を遂げたものもある。

ハエトリソウは北アメリカ出身で、窒素などの養分をあまり含まないやせた土地だったために、虫のからだから窒素を含んだ物質を摂取する能力を身につけた。

「そうまでしてどうしてやせた土地で生きていくのか?と思われるかもしれませんが、でもやせた土地だと、他の植物は棲めないため、競争がない。だから、こういう能力を身につけてでもハエトリソウは、この地で生きていくことを決めたんでしょうね。」

ネナシカズラは根がなく、他の植物の茎に巻きついて吸い付くように突起が伸び、その植物から栄養を奪う寄生植物。

「でもネナシカズラは決して宿主が枯れるほどには栄養を奪わない。自分の生き方を知り、わきまを心得ている。」

ピーナッツは南米、ブラジルあたりが原産で、河原近くの砂地を好む。かさかさの殻はなんのため?。

「大雨の後で増水すれば、他の植物は流されまいとするんでしょうが、ピーナッツは『チャンス!』とばかりに流されていくんです。あのサヤはカサカサなので、水に浮かぶでしょう。そして、流れ着いた新天地ですくすくと生育していくんです。そうして生育地を広げて生き抜いてきました。」(次号へつづく)



庭に白花の彼岸花が咲きました



桑原家の人気者 猫のレモン君

厳俊さん 26才

この中国人留學生の名前を記憶にとどめておきたい。この文章を書いている。彼は9月16日の夕刻、高槻あたりの淀川で、濁流にあやまって落ちてしまった6才の子供を、自らの危険も顧みずに川に飛び込んで助け出した。子供も厳俊さんも無事だったが、もうすこし遅ければ子供は命を落としていたところだったそうだ。

「大人として必ず助けなければならぬ」と思いました」

坊主頭に眼鏡をかけた実直そうな厳俊さんは日本語でインタビューに答えている。「これから日本の発展の経験勉強して中国に帰って頑張ります。日中間係が良くなるために頑張ります」

16日といえば前日から大雨で、未明から嵐山渡月橋付近が冠水するなど各地で被害がでた日である。すでに雨は止んでいたけれど、助けることだけを考えて、茶色い濁流に飛び込んだ厳俊さんを讀みたい。

上海出身で中国の大学を卒業し、3年前に経済学を学ぶため来日、来年春から大学院の博士課程へ進むことになっているそうだ。桑原専慶流の流祖、仙溪の「富春軒」の軒号は、中国後漢時代の文人「嚴子陵(厳光)」が好んで

住んだ富春山からとったのだらうと父は言っていた。厳光の高尚な氣風を慕う文人も多く、政治よりも自然や人の営みに輝きを求めるような人であったそうだ。

厳光と厳俊くん。名が同じというだけで何か繋がりを感じてしまふのは浅はかかもしれないが、爽快な志の持ち主という点で、自分の中では関連づけて記憶にとどめておきたいと思う。

「義を見てせざるは勇無きなり」





躑躅^{つつじ}

仙溪

躑躅の生花は枝が折れやすいので骨が折れる。水際で枝どうしを添わせるのもひと苦労である。花屋によく締まった躑躅の太枝があったので、二本を買い求めて生花をいけた。

花屋では霧島躑躅ではないかとのことだったが、躑躅は花の時期でも判別が難しい。ただ、よく見ると春でもないのに若葉が芽吹いているので、山躑躅の系統だと思われる。山躑躅は春と夏に葉が生え替わる性質があるそう。霧島躑躅も山躑躅の系統である。

日本はツツジの国と呼んでもいいくらい多くの自生種と園芸品種があり、その栽培の歴史も古い。元禄5年（1692年）には江戸染井村の伊藤伊兵衛がツツジとサツキの専門書「錦繡枕」を出版していて、そこには170を越える品種が紹介されている（ちなみに国立国会図書館の公開デジタル資料としてインターネットで閲覧できる）。「立花時勢粧」が出版された4年後にそれだけの書物が編まれていることを見ても、江戸時代前期には、かなり園芸が盛んであったことが想像できる。

しかし躑躅の良いものはそんなに多く出回らない。優れた育種技術をもった産地が増えることを望む。





檜扇の実

〈10頁の花〉 櫻子

檜扇の実は和花とも洋花とも相性
がいい。

この明るい緑色にふくらんだ実
は、やがて茶色く枯れて割れると中
から漆黒の丸い種子が並んで現れ
る。この黒い種子は「ぬばたま」「う
ばたま」と呼ばれる。射干玉、烏羽
玉と書く。万葉集には81首も詠まれ
ているくらい好まれたことが伺え
る。艶やかな黒い色に、小さいのに
強い個性を感じる。

作例ではまだ若い檜扇の実の爽や
かさに深紅の薔薇と赤い縞模様のア
ンスリウムをとり合わせた。花器
は衝立のような平たい形で、小石を
入れた上に細長い剣山を置いていけ
ている。

日本古来の植物と、熱帯の个性的
な花と、赤い薔薇。色彩と花の形で
選んだ感覚のないけばだが、不思
義と調和している。

こんな出会いを楽しむのもいいけ
ば
なの面白さだと思う。

盛りだくさんのお買物

〈11頁の花〉 櫻子

京都市左京区鹿ヶ谷特産なので鹿
ヶ谷かぼちゃという。

瓢箪のかたちをした南瓜で、上の
部分は繊維が多く水っぽいのでスー
プなどにする。



下の方は普通に炊いたり、丸ごと詰め物をしてオーブンで焼いても美味しい。上と下の調理方を変えなければならぬ、少し手間のかかる野菜だ。だから中々食べられない。京都の人でも食べた事のある人は少ないと思う。

今年は岡山で作られた鹿ヶ谷かぼちゃが届いたので早速奥の座敷に飾らせてもらった。

いつも料理しようかと悩んでいたら、花屋さんで角のようになったオクラと黒い唐辛子（ブラックフィンガー）を見つけた。どちらも鑑賞用なので食べられないが、愛用の買物籠に盛り込んだ。私の普段のお買物は、食べ物を買う量がとても多い。

気がつくとも袋からはみ出して持てない状態にまでなっている、それをいけばなで表現しよう。

料理の連載をしていた雑誌でピツタリと思うようなイラストを描けたこともあるくらい。

花材 鹿ヶ谷かぼちゃ（瓜科）

ザクロ（柘榴科）

オクラ（葵科）

黒唐辛子（茄子科）

葉鶏頭（莧科）

花器 エコクラフトの買物籠





出合い花 (1)

仙溪

投稿お待ちしています

皆さんはいけばなの「出合い」を楽しんでいますか？

先月号では二種のとり合わせでいけたが、花材の出合い、器の出合いをとても意識した。

いけばなの稽古では先生が花を用意する。できるだけ状態のいい、できれば季節の花材を、毎回違ったり合わせて用意するのはなかなか骨が折れる。でも自分が考えた組み合わせでいい感じのいけばなになったときは素直に嬉しい。花屋さんにも感謝である。

普段、家に花をいけていて感じるのは、花材の「出合い」が生み出す新鮮な美しさだ。なにげなくとり合わせた花が輝きを発することがある。もちろん「器」との出合いも大切な要素だ。飾る場との調和も大事。花と花、花と器と空間の出合いを楽しむ気持ちを持ちましょう。

この頁の作例では、ある花材一本に、別の花材一本をとり合わせていけることで、「出合い」が際立ついけばなにしてみようと試みた。たった二本のいけばなだが、異なる植物同士を「寄り添う」ようにいけることで、ささやかではあるが微笑ましい情景が生まれた。

花同士が寄り添う姿の清々しさ。私たち人間も、拒絶や対立や見て見ぬ振りではなく、もっと寄り添う気持ちを大事にしたいですね。

そんなわけで、流派のホームページで「二本で寄り添う『出合い花』(仮称)」を投稿してもらえようとしようと検討中。その節には皆さんの気持ちがこめられた、ほのぼのとしたいけばなの投稿を楽しみにしています。

花材 屋久島木萩(豆科)

二輪菊(菊科)

花器 陶湯呑(清水卯一作)

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
10 月号
No.616

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





花梨かりん

△表紙の花▽ 櫻子

花屋さんで花梨を見つけた。しなやかな枝の雰囲気惹かれて活けたくなった。かりんの実はとても重い。重すぎて枝から落ちることもあるらしい。その実を支える枝はとても硬い。

硬くて重い木を活けるのは難しいので、そんな時は盛花はまずやめた方がよい。投げ入れで安定の良い花器を選ばないと倒れる事もありうる。

余分な葉は取り去り実の艶やかな美しさを見せたいと思う。この秋一番の大輪の一字菊と赤いボリスベッカーを取り合わせて。

花材 花梨（薔薇科）

菊2種（菊科）

花器 焼締花器

稲科の植物

△2頁の花▽ 櫻子

夏の終わり頃から好んでグリーンスケールを活けている。

偽小判草にせこはんそうという和名だが、本来の小判草よりも花穂が平たくて艶がある。稲科の植物だが、葉も花穂も良く日持ちしてくれて、少しずつ枯れ色になりながらも足元の花を引き立ててくれた。

稲科の植物たちも多彩になってきた。昔から使われてきたのは薄や栗すすき、唐黍とうきび、パンパスグラスなどだが、今回のグリーンスケールを始め、オバタス、バニカム、スモークグラス、などはまだ知らない人も多いかも。



1本ならとても優しく弱々しいが、集めていけると稲科らしい強さが現れる。実際見た目だけでなく丈夫な草花だ。取り合わせた花が終わっても、又新しい花といけ直したり、ドライフラワーとして暫くの間飾って楽しんでいる。

稲科は、食物としていけばなどとして、本当に感謝すべき植物。

花材 グリーンスケール(稲科)

ビバーナムの実(忍冬科)

鶏頭4色(鳶科)

花器 波文陶花器

自然の煌めき

△3頁の花▽ 仙溪

薄と秋草3種の投入。薄は茎の途中で切つて、穂の位置を低くしている。

薄の穂が出ると秋なんだなーと感じる心。秋刀魚や栗ごはんを食べても同じように感じられる。そんな感覚を持っていることに、有り難いと思う。

薄の穂にもいろんな色の違いがあることを、花をいけながら教わった。個人的には赤みの強い穂に惹かれる。

自然の煌めきに出合いたくて花をいけていると云つてもいい。花器を選び、とり合わせを考え、いけ方を工夫して新たな煌めきに出合おう。

花材 薄(稲科)

秋明菊(金鳳花科)

二輪菊(菊科)

桔梗(桔梗科)

花器 耳付陶花瓶



おもむくまま 仙溪

3色のネリネをそれぞれ3本、4本、5本とり合わせて、合計12本つけた。心のおもむくままに、3つの色を不規則に配置してみた。ふんわりとした優しさが感じられる。

このいけ方ではなく色別に集めていけると、色彩をより強く感じるいけになる。同じ花材をいけても、いけ方次第で受ける印象が違ってくることを、いろいろないけ方を試しながら、実感として身につけていたきたい。

相手に選んだ檜扇ひおうぎの実は、短く集めてみても、自然な枝の動きのため野趣的な雰囲気が残る。そのためネリネも野に咲くイメージでいけている。もっと沢山の実のかたまりをつくれたとしたら、ネリネの配置もより強いものにしただろう。

花をいける時、自然調か現代調か、どちらでいけるのかを決めていけるのは大切なことである。

ネリネの茎の線、花どうしの空間に注意していけすめる。本数が多いので難しいが、花が居心地良さそうな場所にいけるといい。ギョリュウで水際を隠した。

花材 ネリネ3色（彼岸花科）

南アフリカ原産

檜扇の実（菖蒲科）

東アジア原産

御柳（ギョリュウ科）

中国原産

花器 紺色釉陶鉢

立花秘傳抄 四 (前号の続き)

松竹梅三瓶の事

松竹梅の三瓶は、祝言の花にして、三瓶のな
らべよう古來說々あり。まず一説には

竹中

松上座

梅下

かように並ぶところは、松に相統あいづいて、竹
は目出度めでたきものなれば左に立てる。又云う、松
竹梅の言葉の序をもつて、座をさだむるといえ
り。

梅二

松一

竹三

又かように並ぶる心は、梅は諸花の長にして、
春に先だつゆえ、花の兄あにとも云う。さるによつて、
左に立てるとなり。又云う、松竹は四季ともに
用う。梅は当季の珍花なる故、竹の上に立てる

ともいえり。当代多くはこの儀にしたがう。

松竹梅三瓶の時、松竹の方にも、梅をつかい
て苦しからず。中央は直心なり。梅は除心にて
も苦しからず。胴、前置の二色いろは、三瓶ともに
替えず。一方の花あつき時は、一方かるく立つ
べし。

松竹梅の三瓶を、一瓶によせたる時は、心は
松。請は竹。副、流枝には梅を用ゆ。直心にも
除心にも立てる。然るに予よこの花形かぎようのころを
取て、松のたぐい一色、竹のたぐい一色、梅の
たぐい一色、この三色をもつて外の草木をまじ
えず、あらたに花形を指し出して、図にするす
ものなり。これ古人の指しもらしたる花形にし
て、真の松竹梅とも、名付くべきものか。

棚の上の花は(胴束どうづかという)長たけひくく、横長く、
景気すさまじく、たとえば心しんは大木を見るがご
とく、流枝は千丈の松、岩上によこたわるがご
とく、ちいさき物を大に、景気をうつす。これ

一つの習なり。

立花陰陽の事

夫陰陽わかれて、天地となり、人その中に生
して諸道諸芸を翫あそぶに、陰陽そなわらずと云う
事なし。まして立花において。草木出生の道理
をかんがえ、野山数沢の景気を瓶上にうつすに、
陰陽を離る事なし。これ立花第一とする所なり。

土は本陰なり。草木は陽気を請けて、発生し
たる物なり。土をはなれるば、必ず枯る。水を
もつて養う時は、陰陽和合して枯れず。然れども、
かりなる物ゆえ、久しからず。又冬の花を、室むろ
へ入れて陽気をかり、夏の花を井に釣りて、陰
気をかる。されば陽中の陰花あり。又陰中の陽
花あり。陰ばかりにては咲かざるゆえ、世上に
黒色の花なき物とぞ。

古詩に

化工不隔銅瓶水 一夜芙蓉三四花
かこうはへだてずどうびんのみず いちやふようさんよんか

古歌

立花の^{たてはな} うき世の水に ひたされて
命はきれて きれぬ物かは

居所によつてこれをいえば、明かり
の方を陽にとり、珍花残花、主居客居
の立て様あり。理をもつてこれをい
え、瓶の内に陰陽ありて、ささぬ草あ
り。形をもつてこれをいえば、きおい
てかたきものは陰なり。なびきてやわ
らかなる物は陽にして、花形を調ふる
ところなり。数をもつていう時は、調^{ちよう}
は陰、半は陽。これ祝言不祝言をわか
つ物なり。赤白^{しやく}円方、長短軽重、左右
高下、みな陰陽にして、一瓶の花を成
就する所なり。

備考

「松竹梅」についての文中の「左」は向かっ
て右。また、「序」とは順序の意味。
「化工」とは造物者のしわざ。天のしわざ。
数の偶数Ⅱ調（陰）、奇数Ⅱ半（陽）。

※文中で「真の松竹梅」と名付けられた立花図。
松、竹、梅の類いだけで立てられている。

第九十八図

立花 松除真

松竹梅 富春軒

松 梅 竹 熊笹



※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本
華道社刊）

『花道古書集成 第一期第一巻』（大日本華道界刊
思文閣出版刊）



仁清生地の花入れ

櫻子

仁清生地とは京都の清水焼を形にした野々村仁清の作風を生かした生地のこと。淡い卵色の生地で暖かみのある焼き物である。

縦線の柄が素朴で優しいので、秋の風情を感じる花を取り合わせた。

花材 チョコレートコスモス(菊科)

アスチルベ(雪の下科)

オランダセダム(丹慶草科)

花器 仁清線模様花瓶



NHKテレビ(Eテレ)
きょうの料理

「親子丼・いなりずし・おにぎり」

桑原櫻子

放送日 9月15日(月)祝

9月16日(火) 再放送

旭葉蘭 七葉

仙溪

花型 生花 行型
花器 煤竹筒

葉蘭は百合科・葉蘭属、中国原産の常緑多年草。根茎を乾燥したものを煎じて服用すると、利尿、強心、去痰、強壯作用がある。春に地表す

れすれに花が咲くが目立たない。葉は根茎から直接出て一枚ずつ立つ。最初は巻いた状態で出てくるが、日に当たると成長が止まるため、巻

きの外側はせまく、内側はひろくなる。葉には右巻きと左巻きがあるの
で、葉脈の右の広い葉と、左の広い

このような葉の性質を見分けて、美しい姿にいけることが大切である。



紫蘭 秋桜

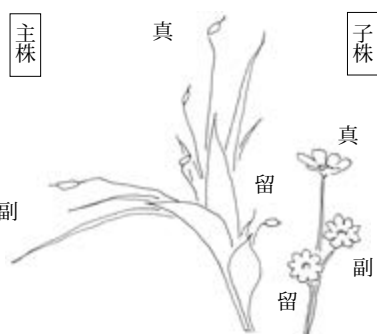
しらん こすもす

仙溪

花型 生花 株分

花器 耳付陶コンポート

紫蘭は蘭科・紫蘭属の多年草。春に紫色の花が咲く頃は背が低い
が、晩夏の実の頃には葉も花茎も伸びや
かになっている。花茎を抜きとり、
葉も一枚ずつにしていける。秋





桜と株分けにすると、紫蘭の個性が際立つ。はじめて合わせてみたが、感じの良い組み合わせである。

レモンちゃん

彼が家に来て2年。いけばなを見る目も肥えてきたようで、あーこわい。どうやら気に入るとそばまで来てくれる。ただ花の水が呑みたいだけという噂もあるが。

写真右から7月20日、檜扇生花のそばでほっこり。9月16日、花梨と菊二種の投入を拝見中。レモン先生、お手柔らかにお願いします。





出合い花（13）

草牡丹の実

仙溪

バンド

草牡丹をはじめていけた。

金鳳花科の仲間には花のあと白い毛がのびる。例えば同じ金鳳花科の翁草は、花後の白い綿毛を翁の白髪頭に例えてその名がある。

草牡丹は金鳳花科・仙人掌属で、日本原産の半低木。下部が木質化して枯れ残る。名前にあるように、牡丹の葉に丸みを加えたような葉である。花は淡い紫色の釣り鐘状で、下向きに集まって咲き、先端が4つに割けて反り返る。

花は可憐だが、花のあとには写真のような個性的な姿になる。出合わせる相手も、個性的でしかも色鮮やかな花を選ぶことで、草牡丹の実の造形美を際立たせたい。美しいピンク色のバンドは絶妙な出合いを生んでくれた。

花材 草牡丹の実（金鳳花科）

バンド（蘭科）

花器 陶花瓶「白珠」

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2015 年

10 月号

No.628

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





菊 萩

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 菊(菊科)

子株 萩(豆科)

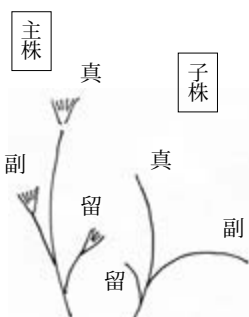
花器 粉引陶花器(伊藤典哲作)

家庭画報10月号に、櫻子が二色の豆を使った豆ご飯を紹介しているが、それには「萩ご飯」の名前がつけられている。緑と赤の豆色を、萩の葉と花になぞらえての命名だが、心躍る楽しい名付け方だと思ふ。

萩は古来より日本人に愛されてきた。万葉集に一番多く詠まれているし、美術・工芸にも好んで描かれている。

菊の生花は撓める技術が難しく、敬遠される人が多いが、一株にこだわらないで、あつさりとした株分けにして、とり合わせる花との季節の色彩を楽しむ気持でいけてみてはどうだろう。

作例では同色異種の花で上品にまとめたが、萩に対して菊がやや重く見える。小菊や嵯峨菊のほうがバランスが良かったかもしれない。



出逢い花（23）

△3頁の花▽

仙溪

糸芭蕉の枯葉（芭蕉科）

アスコセンダ（蘭科）

植物が枯れた姿も味わい深い。
たまたま花屋で、いい感じに枯れ

た糸芭蕉の葉を見つけたので、深紅の蘭と出逢い花にしてみた。

この赤い蘭の名前はアスコセンダ。洋蘭に詳しい方はご存知と思う

が、私ははじめて名前を知った。アスコセンダという蘭は、バンダとアスコセントラムの交配で生まれた蘭で、多くの品種があるらしい。小型

のバンダというところだが、花数が多いので、東南アジアでは大変人気があり、庭の木にぶら下げて育てているそう。

枯れた花材にはみずみずしさを加えるように相手を選ぶといい。そうすることでお互いの存在感が際立つ。

さて、器をどうしたものか。南国を連想させてくれるような、それでいて枯葉のフォルムと響き合うような器はないものか。と、ぶつぶつ云いながら探す。漸く一つ引つ張り出してきた。

籠花

△表紙の花▽

櫻子

秋の草花が出揃う頃になると籠に花をいけなくなる。

掛花も投げ入れも籠に代わり、又果物や南瓜、さつま芋も暫く籠盛りにして眺めている。

この竹籠は昔から家にあるものだが、唐人笠籠花入という籠に似ている。韓国の人がかぶる帽子を逆にしたような形から唐人笠と呼ばれる。

この籠には蔓の手が付いているので固苦しくなくどんな花でも気軽に飾っている。前方にやや傾いているような形で口元にもたつぷりの葉を添えられる。

秋明菊と鳥兜、どちらも綺麗に咲く時季の短い季節の花だ。紅葉し始めた楓を添えた。

花材 秋明菊（金鳳花科）

鳥兜（金鳳花科）

楓（楓科）

花器 手付唐人笠籠

◆横から見た、いけばなの奥行き。





基本花型にいける

主材 檜扇の実(菖蒲科)

副材 薔薇(薔薇科)

ピンクッション(ヤマモガ

シ科)

花器 陶コンポート

盛花の基本花型には立体と斜体があり、主材の姿が立ち上る場合は立体型に、横へひろがる場合は斜体型にいける。

主材に選んだ檜扇の実は立体・斜体どちらにもいけられる花材だが、一本しかない場合は立体型がいいだろう。

立体副主型



◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。



① 主材の檜扇の実を、いけあがりを想像して、副の位置に立てる。立ち姿に見える向きを探して、やや前傾させている。



③ 副の足元から前方へ出るように、胴の薔薇を出す。写真では短く見えるが、実際には真の薔薇よりも長い。



② すぐ後ろに薔薇を立てる。真の位置。



④ 留の位置に薔薇を入れて水際をととのえ、その後ろの中間にピンクッションを覗かせたところ。さらに中間にピンクッション、控に檜扇の実を見せて、奥行きをつくる。(4頁の花)



横から見たところ。



それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解

心の事

一瓶の内、高く直なるを心と名付けることは
儒家の中心、仏者の花心と云うより出たり。さ
るによつて極真立には心直にかたよらざるを本
意とす。それより相生心、合心、二つ真、直心
除心、右五ヶの心を定めて、この外心の名目なし。

心は君のごとく。六の枝は臣のごとし。心は
位有りて、幽玄なるを用うべし。六の枝は勢い
つよく、働きあるを専らとす。これ君臣合体の
意なり。

古人の云く。心はことたらぬ様なるをよしと
す。たとえば上の句、鶯の聲なかりせば雪きえ
ぬ、下の句、山さといかに春をしらまし、と読
むるが如く、下句にて上の句をよくことはり、



(心 = 真)

一首のすがたよろしきように、立花も意得て指
すべきと云えり。又云う、たとえば猿樂の能を
するに、笛、鼓、太鼓をもつて、太夫一人をお
もしろう見するように、はやすといえど、つつ
みは鼓、笛はふえ、一ぶん一ぶんの面白所をな
すがごとく、立花六の枝も、よく心を生立て、
おのれおのれが働きあるべし。

心のみきふとく、葉あつきは賤し。枝左右へ
長きは、請副はたらかず、苔、晒木の重きは低
く立て、梅、柳のかるきは高く、枝なき心は瓶
にのらでも苦しからず。除高きは、胴長くて古
流なり。遠くより見る心は、葉の茂りたるを用
うべし。

梅は冬の内は心に立てず。柳は初冬より立て
初る。一本立てても苦しからずといえど、河柳を
あしらう。河柳の心はかならず水際へぬくべし。
藤の心は、松のみき狂い、老いたる風情よし。
南天には風をもたせ、薄は陰陽の葉を見せ、緑
松には古葉をのこし、竹の心は葉先床の角へな
びかせ、水際にて節を見する。ほか之を略す。
口伝。

直心は成る程真直なるをよしとす。除心は梢
正心の上へもどして立てる。常の事なり。行草
の花形に至りては、梢瓶にのらでも苦しからず。
或いはみき異曲に、すわりがたき心ならば、ま
ず瓶に立て置き、さて立ちのきて真横から見
るに、梢正心のとおりにあたれば、必ずすわるべし。
方丈、客殿、書院、仏前の広き所にては、ま
ず心を立て置き、二三間後へよりて、心のすわ
りを見るべし。近く居て立ると、遠くより見る
とは、ちがひあるものなり。さて大枝を取り組
みて、又前のごとく、立ちのきて見るべし。



同志社大学文学部・社会学部 父母会講演

会期 7月18日(土)

会場 同志社大学良心館

講演 「心の花」 桑原仙溪

講演内容の一部を紹介します。

いけばなの大切な要素を3つあげてみましょう。「自然の息吹を敬う心」「花色に心を遊ばせて」「新たな出会いを楽しむ」。自然を敬い、その命をいかすための型の習得。心の中に刻みこまれた色を、花色で表現する。舞台の演出家や

指揮者のように、新たな出会いで花のドラマを生みだす。花と器、花と人、人と人との出逢いをつくる。そんな多様な奥深さをもっているのがいけばなのです。

私はずっと心の花とは何かを問い続けています。2011年5月に安中の教会で献花させていただいた時や、ドイツで花をいけた時に感じたもの、感じてもらったものが、心の花ではないかなと感じています。私は幸い、花を通じて心を伝えられるいい仕事に就いて

います。そのことに感謝し、たくさんの方ができますことを願っています。



花展のいけばなについて

5月下旬に広島で開催された日本いけばな芸術中国展には、当流から18作のいけばなが出品され、どの出品作も気迫のこもった良い花だった。岡山の先生方の熱意に感謝している。

いけばな展は晴れの舞台。大きな花展となると尚更だ。立花大作には締まった松葉を使っていたが、自分で松を育てておられるそう。

今回、花材の運搬にも気を遣われた。トラック輸送だと花がいたむので、大型バスをチャーターして、出品者と共に花材を積んで会場へ運ぶ念の入れ

うだ。

いけた後の花の世話も大切。会場からすぐのホテルに泊まり込み、朝夕の手直しを欠かさない。その際の予備花材も充分に用意されていた。

先のテキストで白黒写真を掲載したが、もう一度カラー写真で現代花について振り返ってみたい。

花展に立花や生花という古典花ではなく、現代花を出品する場合、およそ次のような方向性があると思う。

(一) 山里水の自然をいける

写真①③。

季節の和の花材で、自然の風情や景色を表現するいけばな。

(二) 特殊な花材をいかす

写真④⑥。

普段いけることのないような特別な花材や、とっておきの枯れ物などを使って、それをいかすとり合わせと花形を工夫する。

(三) 色彩を重視した自由な発想

写真⑦⑩。

特殊な花材でなくても、そのものの色彩を際立たせるとり合わせやいけ

を考える。おもいきって数多くいけたり、同系色の濃淡を集めたり、反対色をアクセントにしたり。

以上の他にも熱帯など他国の自然を表現したり、自由ないけ方があっていいが、およそこの三つのうちのどれでいくかを最初に選んで、あとは、出したい雰囲気、色彩、使いたい花材、使いたい花器、やってみたいいけ方などを考えていく。

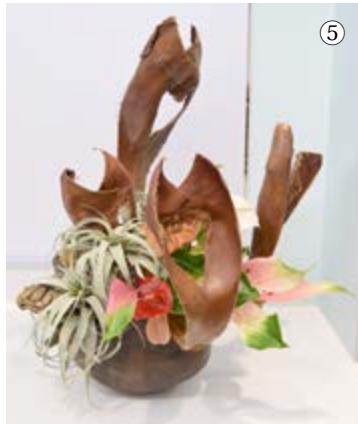
とり合わせる花材が多すぎると、かえって主張のない花になるので注意したい。要は表現の的を絞ること。

そして会場にいかしたところを想像してみ。敷物で色を加えたり、敷板が必要かどうかもある。

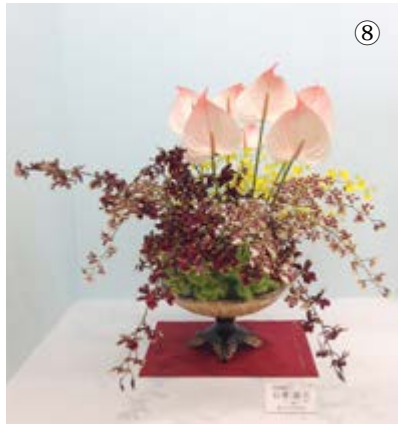
◆山里水の自然をいける



◆特殊な花材をいかす



◆色彩を重視した自由な発想のいけばな





コスモス

桜子

今では日本の秋を彩る花の一つになったコスモス。でも、元を辿るとメキシコの植物だ。メキシコ原産の花にはほかにもダリア、ポインセチアなどが馴染み深い。

メキシコというと熱くて乾燥したイメージを持つが、首都メキシコシティの標高は二千メートル以上あり、昼と夜の温度差が大きい。コスモスは雨季から乾季へ変わる9月から10月に咲く野の花だ。

マリアッチのギター演奏のように、情熱的にコスモスをいけてみるのもいいかもしれないが、今回は日本の里の風景に溶け込んだ花としていけてみた。ただし和花と上下に分けて、印象的に見えるようにした。

花材 コスモス（菊科）

雪柳（薔薇科）

桔梗（桔梗科）

ピンボン菊（菊科）

花器 条文陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。





ネリネ アナベル 櫻子

アナベルは北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸種。白い装飾花が半球状に咲いたあと、作例のように緑色に変わって枝に残る。ちなみにカシワバアジサイも同じ北アメリカ原産。また、花序の大きなピラミッドアジサイ（ミナツキ）は東アジア原産のノリウツギの園芸種だ。

ネリネは南アフリカ原産の球根植物で、日本や中国に分布する彼岸花やリコリスと同じヒガンバナ科だが、属は異なる。

私達は現在、昔よりも多くの花をあたりまえのようにいけられるようになったけれど、それらの原種の生態や、栽培のご苦労を知っておきたいと思う。それが一つ一つの花への愛着につながる。

ネリネの茎も生かすようにシンブルな構成にしてみた。

花材 ネリネ（彼岸花科）

アナベル（紫陽花科）

花器 角柱陶花瓶（宮下善爾作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。





パンパスとプロテア 仙溪

南米のパンパスと南アフリカのプロテアを出逢わせた。どちらも未知の大地に根を下ろす、野生の強さを感じる。

インカのような模様が刻まれた花器にいけると、太古の地球の鼓動が聞こえてきそうだ。

花材 パンパス・グラス（稲科）
キング・プロテア（ヤマモガシ科）

煙の木の葉（漆科）

花器 飴色釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。



レモンだより

「人間って花を切ったり挿したり、不思議な生き物だにや〜」



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
10 月号
No.640

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出逢い花 (33)

〈表紙の花〉

仙溪

芭蕉の枯葉 (芭蕉科)

ダリア (菊科)

花器 天目釉「ふくら壺」

柳原睦夫作

不思議な形の実が口を開けたような器だ。写真では見えないが、三つの膨らみを持つ器で、どの角度から見ても異なった表情を持つている。風をはらんだようにくると巻いた芭蕉の枯葉。深い赤色のダリア。これらを器の口を見せるようにいけてみた。器の膨らみと枯葉の丸みが呼応する角度を探しながら。次にこの器にいける時は何がいいだろう。想像の翼をひろげて楽しんでいる。

横から見た奥行き



南京櫨 なんきんはぎ

〈2頁の花〉

櫻子

花材 南京櫨 (燈台草科)

鶏頭 (鳶科)

ピンククッション

(ヤマモガシ科)

花器 デルフト焼陶花瓶

ナンキンハゼは白い実が印象的な花材だが、弾ける前の緑色の実も面白い。

作例では枝からぶら下がる実を造形としてとらえ、レモンイエローの鶏頭と鮮やかなオレンジ色のピンククッションをとり合わせて、西洋の陶花瓶にいけてみた。

ナンキンハゼは中国原産。ピンクッションは南アフリカ原産。ケイトウはインド原産。ある意味ミスマッチな出逢いでも、洋陶器にいけると違和感がなくなる。ただし花器の絵柄と花の色合いには注意したい。

横から見た奥行き





蓮台

〈3頁の花〉

櫻子

花材 蓮台（蓮科）

アンズリウム（里芋科）
偽小判草（稲科）

花器 白黒陶扁壺（林平八郎作）

見た感じが渋く暗い印象の花材でも、とり合わせを工夫することで、意外に面白いけなになることがある。

蓮台がその一つで、例えば蓮台に菊では面白みに欠けるが（菊の品種にもよる）、アンズリウムとは違った印象になる。アンズリウムは赤、薄ピンク、グリーンと変化をつけ、さらにニセコバンソウ（西洋小判草、ワイルドオート）を加えると、全体に優しい雰囲気になる。

器の選択も重要なポイントだ。この白黒の花器は、まるで救世主のように花たちを一つにまとめてくれる。有難い特別で不思議な器だ。

横から見た奥行き





初歩の盛花

◎枝1本と花2本のいけばな

花材 丸葉の木（満作科）

スプレー菊2種（菊科）

花器 かいらぎ釉水盤（木村盛伸作）
ある程度のポリウムがある枝と、葉が美しくついた花のとり合わせなら、枝1本と花2本でも、シンプルないけばなの稽古になる。

たった3本をいけるだけだけれど、それぞれを、どんな角度に倒せばいいか、どんな長さに切ればいいのか、考えながらいけることで、いけばなに大切なバランス感覚が養われる。

前後左右上下のバランス。枝の伸びと葉の繁みのバランスなどなど。シンプルなものほど、ものの働きを掴みやすい。

横から見た奥行き



巨人のいけばな感

今月の表紙の器を作られた柳原睦夫さんに聞いたお話。

柳原さんは前衛化道家の中川幸夫氏と親交があり、「手を入れるのが怖い！」と思うような器を作って。そしたら僕が命がけで花をいけるから」と言われたそうだ。

その言葉から真剣勝負の緊張感を覚えた。中川幸夫氏は、いけばなにどんな思いを持っていたのか。

いけばなに對する思いは人それぞれだ。経験とともに思いも深まるが、それぞれの時点の真剣な思いは、どれも皆いけばなにとって大切な要素なんだと思う。

でも、自分には無い、より深いいけばな哲学に触れることは、自分のいけばなにとって貴重な暗示になる。先の言葉に出合って、私がこれから花をいける時、きっと何かが違ってくるだろう。

言葉から受ける影響もあれば、写真から受ける影響もある。

工藤和彦先生の「ア ندエスの花影」という作品集では、古代ペルーの土器に、不思議な形や色彩の植物がいけられている。そこには花と器の出逢いを心から楽しんでおられる工藤先生を感じて、やっぱりいけばなはそうなんだと納得する一方で、真剣勝負の凄みに打ち震えてもいる。

二人の巨人のいけばな感は、多くの人に影響を与えている。

秋草の立花

仙溪

日本いけばな懇話会

「秋草をいける」 出品作

9月17日～18日 建仁寺西来院

花材 ススキ チョウジソウ

ワレモコウ クサボタン

フジアザミ タムラソウ
サワギキョウ サギソウ
シモバシラ リンドウ
シロバナホトトギス
コギク

秋草だけで立てる立花ははじめて
なので、良い経験になった。丁字草
や草牡丹、霜柱などはいけるのものは

じめてだった。丁字草の長細い葉は
オレンジ色に色づいて美しい。草牡丹
は関東ではよくいけられる花だそ
うだ。
いけこみ後、ゲストを交えた座談
会をしたが、いけばなへの様々な思
いが聞けて大変有意義だった。皆そ
れぞれに熱い思いを持っている。



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ②7

立花秘傳抄 一

常磐木ときわぎ之部 (つづき)

今月号では一旦、文章の転載をお休みして、常磐木の

部に出てきた花材について、「立花時勢粧」の立花図の中からいくつか紹介してみよう。

檜ひのき (文・テキスト637号)

「立花時勢粧」の絵図の中に、檜しのの真の立花は四図ある。一つはテキスト615号と637号ですでに二度掲載している。寺田八郎兵衛が立てた「左、草之対之花」で、

右に松の真(寺田清兵衛)、左に檜の真という「対の立花」の左側(向かつて右側)。檜に松、菊、小菊、梅擬、などがとり合わせられた秋の立花である。

あとの三つは春と夏と冬。常緑樹なので季節を問わない。その内二つは富春軒が立てていることからして、檜は扱いが難しいことが想像できる。文中でも「初心巧者のわかれは檜にてよくあらわるる物なり」と述べている。



第三十五図

立花 檜除真 富春軒
檜 晒木 芍薬 松 要 小菊



第二十四図

立花 柏除真 松本氏
柏 菊 小菊 梅擬 松 椿
柘植 著栽

今号では春の芍薬との対比が見事な一瓶を掲載しておく。真の下がり枝と請の上り枝の形が絶妙なバランスだ。ちなみにこの絵図は「立花時勢粧・中」の二番目に登場する。富春軒にとつても特に思い入れの深い一作と思われる。

柏かしわ
(文…テキスト637号〜638号)

「立花時勢粧」の絵図の中に、柏が真に使われた立花は二作。

松本氏（初版では松本近江）の柏真立花は除真の内草の花形として「立花時勢粧・上」にある。柏の葉を左右二カ所で見せて、その間を梅擬や菊が繊細に伸びている。面と線の対比だ。また、花器の形が変わっている。釣り鐘形で、立花瓶には大抵あるくびれが無い。おそらく柏

の形が際立つようにとの配慮だと思う。

弁秀の柏真立花は「雑体之図」が集められた「立花時勢粧・中」にある。こちらの柏は片側に集められ、立ち上る松とのバランスが見所となっている。

どちらも季節は秋で、柏の葉先が一部黄色くなったものを使っているのが彩色によってわかる。共通して菊と椿が取り合わされている。



第七十四図
立花 柏除真 弁秀
柏 松 苔 菊 小菊 椿 柘植



第四十二図
立花 松除真 濱崎九左衛門
松 晒木 百合 柏 夏はぜ
柘植 小菊 小羊齒 杜若 蒼莪

弁秀の立花は、前掲の富春軒の檜真立花と花形に共通したところを感じる。偶然の発見だが、富春軒仙溪が好んだ花形の一つだろう。

もう一作、正真に柏を使った立花を掲載しておく。濱崎九左衛門の松真立花で、百合、杜若と取り合わされ

ている。量感のある柏の正真は、常の立花の常識を覆すほどだが、下段から勢よく立ち上る真の松と、左前方へ中段から下がる胴の晒木が花形に動きを与え、他の花材もそれに呼応するように伸びつつ不思議なバランスを作っている。柏の塊を正真に使うという発想にも、そこ



寺内長三郎

第七十五図

立花 桐除真 寺内長三郎
 梅 菊 小菊 松 晒木 苔 榎木
 熊笹 夏はぜ 檉木 柏 檜扇

に動きを与える役枝の働^{はたら}きにも、自由闊達な精神と技量を感じる一作である。花器の形も花形に呼応している。

梅^{とが}
 (文：テキスト639号)

『立花時勢粧』の絵図の中に、梅^{しん}真の立花は寺内長三郎の一図のみで、他の絵図にも梅らしきものは見当たらない。簡単には集められない貴重な花材だったのか。

この梅真立花は曲^{まが}が少なく、静かで厳かな印象を受ける。右下の水際に梅の苔木が見え、正真、副^{さへ}の菊と、胴の紅葉した夏櫨が彩りを与え、枇杷の大葉がメリハリをつけている。請の晒木は短めに、流枝の梅と控枝の松を目立たせている。

【訂正】

テキスト615 5頁 中段

別に花道の上に、七つの理^{ことわり}あるとあり。

七つの理^{ことわり}あり事あり。

※参考文献

- 『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』(日本華道社刊)
- 『花道古書集成 第一期第二巻』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)
- ※立花図転載
- 『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)



梅擬

うめもどき

仙溪

花材

梅擬（繡の木科）

大輪菊「サンバマム」（菊科）

花器

陶水盤

そろそろウメモドキの出てくる季節である。小さな葉を丁寧に取り除くのは根気の要る作業で、他の花材にくらべても、特別に高価なものも頷ける。

葉が梅に似て、また梅の花を小さくしたような薄紫色の花が咲くので名付けられた。雌雄異株。花弁の数は4〜5個、ときには6個の時もあるそうだ。実には発芽抑制作用があつて、鳥が食べて糞と一緒に種が落ちたところで発芽するようになっていて、鳥に種を遠くへ運んでもらうための工夫だ。

そしていよいよキクの季節でもある。この季節にしかいけられない糸菊や嵯峨菊、肥後菊などに加えて、近年は洋菊あるいは洋風の菊が増えてきている。その産地の中でも特徴のあるのが飛騨と兵庫（三木と淡路島）だ。それぞれ飛騨マム、兵庫サンバマムの名前で呼ばれているが、作例の大輪菊もサンバマムの一種である。

花だけでなく葉も美しく、生産者の情熱と愛情を感じる。独特の個性を活かせるとり合わせを考えたい。

朝の連続テレビ小説

仙溪

好き嫌いはあるだろうが、私はNHKの朝の連続テレビ小説をほぼ欠かさずに見ている。そして時には登場人物のセリフを書き留めることもある。

東北の大震災と原発事故以来、人と自然との関わり方を考えることが多くなつたし、昔の人々の暮らしと現在とでは何がどう違つていて、これからどうすればいいのかと悩んだりする。そんな思いがあるので「あさが来た」のヒロインの姉夫婦の言葉に共感したり、「とと姉ちゃん」に描かれた戦中戦後の人々の暮らしとその思いに心を打たれる。

「大きうなるうやなんて思わんかてええ、地に足つけてしっかり歩くことさえできたら、それでええんだす」（はつ・あさが来た）

「誰に愛想笑いして頭下げることものうて、土の上に立つて自分で耕して、ミカン作つて家建てて子を育てて、こないな誇りあれへん。孫まで見せてもろて、有難すぎておつくるわ」（惣兵衛・あさが来た）

「美しいものは、いつの世でも、お金やヒマとは関係がない。みがかれた感覚と、まいにちの暮らしへの、しっかりと眼と、そして絶えず努力する手だけが、一番うつくしいものを、いつも作り上げる」（花森安治・「暮しの手帳」編集長）



山保呂之

櫻子

花材 山保呂之の実（茄子科）

秋明菊（金鳳花科）

桔梗（桔梗科）

花器 陶花器

大好きなヤマホロシの実。自然な動きの枝が器に留まると、なんともいえない愛らしさを感じる。この愛おしい感じは何なのだろう。森の中で宝石を見つけたような感覚。ここに居るよという声が聞こえてきそう。

ヤマホロシはヒヨドリジョウゴとよく似ている。茄子の花を小さくしたような白または薄紫色の花が咲いたあと、実が緑色から黄色、赤色へと色づいてゆく。

作例のヤマホロシは、葉の形もなんだか可愛い。小さいのに、アピールがとても上手。

シュウメイギクとキキョウは充分に水揚げしておいて、さつとつけた。野山の風情だが、緑色の斑点の器にいけると、明るく飾っておける。花形は自然体で。



野茨と竜胆の二瓶飾り のいばら りんどう にへい

仙溪

主瓶 野茨（薔薇科）

花器：紺釉壺

副瓶 竜胆（竜胆科）

花器：朱塗り碗

8月の末に撮影したので、ノイバラの実がまだ緑色だが、一週間後にはオレンジ色の実になった枝が売られていた。

ノイバラは自然では棘だらけなので、痛くていけられない。今は棘の殆ど無いものが手に入るお蔭で、この軽やかな実の美しさをいけて楽しむことができる。有難いことだと思う。

作例のノイバラは大きめの枝を2本買っていきっているが、できれば3本はあったほうがいいだろう。

実が赤くない分、副瓶に朱塗りの碗を選んで色のバランスをとっている。主瓶には動きをつくり、副瓶は静かな付まいに。





出逢い花（34）

仙溪

ビバーナムの実（忍冬科）

秋桜（菊科）

花器 陶花瓶（清水卯一作）

ビバーナムの赤い実とコスモスを出逢わせてみた。しっとり艶やかな赤い実が不定型に集まって枝に留まっている。葉はすでに無いので、相手には葉のある花がいいが、多すぎても実が目立たなくなる。

コスモスは鉢植で買った。丈は短けれど、切り花のコスモスではこんなに葉がしっかりしていない。白花もあったが、あえてピンクのコスモスを合わせてみた。モノトーンの器に、赤の濃淡と葉の緑が鮮やかだ。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
10 月号
No.652

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





パンパスグラス

△表紙の花▽ 桜子

花材 パンパスグラス（稲科）

鶏頭2種（莧科）

ビバーナムの実（忍冬科）

花器 菱形紋陶花器

大きな庭でないと栽培が困難なパンパスグラス。雄大な自然の中で伸び伸びと育つイネ科の多年草。8月のお盆の頃出回る若い花穂は剥いても細くて柔らかくボリユームの無いまま萎んでしまう。

9月半ばまで待つと、やっと大きな花穂のパンパスグラスが出てくる。ふさふさした銀白色で絹糸のように光沢がある。私は先端を切り落として、風に揺れるような姿にしているのが好きだ。

今回は花冠が扇型のボンベイ鶏頭と合わせた。インドの種から育ったボンベイ鶏頭。これも輝くような花が特徴だ。色つき始めたビバーナムの実を足元に添えた中秋のいけばな。



横から見た奥行き

アナベル

△2頁の花▽ 桜子

花材 鈴薔薇（薔薇科）

アナベル（紫陽花科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶花瓶（伊藤典哲作）

アナベル：ヨーロッパの美しい女性を思わせるような名前。北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸品種で、真っ白で大きな花房になる。

日本のアジサイと同じく栽培が容易で、毎年良く開花するらしい。京都の御池通り沿いにも沢山植えられていて、咲き始めのグリーンから白、又グリーンへと色に変化していくのを見るのが楽しい。切り花でも夏から秋の頃まで出るので、稽古花としても使うようになった。

秋の半ば頃、花房が大きくなり半分ドライフラワーのような感触になった頃が一番使いやすい。萎れる心配がないので大きく伸びやかにいける事ができる。長くて重いスズバラとバラをフランス良く繋げてくれる。



横から見た奥行き



菊の季節

△3頁の花▽

仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

菊2種（菊科）

南瓜（瓜科）

花器 飴色釉陶花瓶

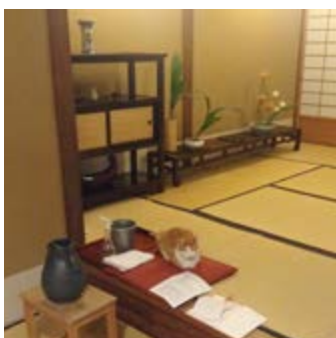
今年も菊の季節がやってきた。朝夕が涼しく感じられた9月でも、飛驒マムなど、限られた菊しか手に入らなかったが、10月には糸菊をはじめ、嵯峨菊、肥後菊など、菊の季節ならではの品種が出そろった。秋の紅葉ものや実ものなどとのとり合わせに、色、形、大きさ、咲き方の様々な種類の中から合わせる菊を選ぶのも楽しみである。

作例は昨年の11月はじめに撮影したもので、いけて数日経ち、菊が見事に大きくなったところ。糸菊などをいける場合は、どのくらいの高さに咲くのか想像してきたい。

丁度いいだいた南瓜と一緒に飾っていたので、撮影にも同じように置いて撮ったが、優しい色合いがよく似合っている。

飛驒マム

飛驒マムは飛驒高山で生産されている色鮮やかな菊のブランド名。高冷地での栽培が花弁の発色に良いようだ。今年はスプレータイプの飛驒マムを9月にいけることができた。左の写真がそれで、いけて2週間経っているのにいつまでも力強い。



レモンちゃんも一緒に稽古したいのかな。



自然の色を大切にする

櫻子

花材 丸葉の木（満作科）

鶏頭（見科）

秋海棠（秋海棠科）

花器 陶花瓶

赤や橙や黄色に色づく葉をいけるのも、秋の楽しみの一つだ。なかでもマルバノキの色付きは特に好き。一本の枝にもグラデーションがあり、さらに一枚の葉の中にも色の変化がある。今年はどうな花と合わせてみようかと、毎年楽しみにしている。

はじめてシュウカイドウを合わせてみた。瑞々しい緑の葉が加わることでマルバノキの葉色がより鮮やかに見える。さらにピンクの花と赤い丸葉が優しく呼応してくれた。ケイトウの黄色と花瓶の紺色が、全体の色彩に厚みを与えてくれた。

こんな風に自然の色を自分なりに生かすことができた時、心から嬉しく思う。



横から見た奥行き

中比なかつなかくろ。そう遠くない昔。

ざるべけんやなしないでいられようか。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ③⑧

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

くちなし

非祝言。水ぎわ。

梔子。一名、越桃。禪友。

桐の花

祝言。心、請、副。

一名、泡桐。棠桐。ひとは草(蔵玉集)。

桐の花、心に立てて面白き物なり。中比なかつの人、立てることを知らざるゆえ、これを用いず。古人の花形略はながたあり。今様これに随したがいて用いる。惣じて立花に嫌うべき物は、雑木、雑草、香のあしきもの、針のあるもの、食物の類、これを嫌う。然るに近代は朝鮮国その外遠境ほかより、珍しき草木多く出せり。花伝書に載らざる花なりとて、指さざるべけんや。

第三十四図

立花 梅擬除真

富春軒

梅擬 晒木 菊 松 椿 栢 植 熊笹 小菊 柏



菊薫る秋の立花。「立花時勢粧・中」の最初の図。富春軒作で堂々としている。枝垂れた梅擬によって球体を感じる。左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えている。この枯れ枝が、花形の丸みを完成させているようにも見える。富春軒の創意を感じる立花である。

実之部

沢水木

祝言上中より遣い、下る時は下にも遣うべし。

晒木、苔木を付けず。立て様梅花に同じ。

水木

祝言。右に同じ。立花大全に晒木付くと有るは非なり。立てよう梅に同じ。

梅もどき

祝言。晒木用いる。苔木用いず。立て様梅に同じ。

右三木は葉有るといえども、葉をもぎて用うべき。葉もがざれば早く実しおれるなり。又見事ならず。

七かまど

祝言。上中段。

苔木、晒木を用いず。大木有るといえども、木まれなるゆえ、大形は讀、添、胴、控枝ま

第六十四図

立花 梅擬除真

筑摩九郎右衛門

梅擬 薄松 松笠 菊 椿 柏 水仙 嫩



菊から水仙へと移る晩秋の立花。薄の葉が大きく弧を描いて下がり、天を突く真の梅擬との対比が見事。大きな松笠のようなものが使われているのも特徴的である。

でに用い来たり。大枝あらば心に用うべし。

今号で「花の部」から「実の部」に変わる。

ウメモドキのような赤い実の枝は21の図に見られ、内5作で真に使われている。また15の図で菊が合せてある。梅擬と菊は確かによく似合う。

解説の沢水木が現在の何にあたるか調べたが分からない。「水木」にしても、ミズキの実は黒いので別の木を指すのかも。赤い実が集まって描かれているのはウメモドキと同じモチノキ科のアオハダの実か。もしくは濃赤色のタマミズキのようにも見える。これが沢水木のことだろうか。今後も調べてみたいと思う。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二巻』

(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)

第六十九図

立花 沢水木(?) 除真

富田屋甚左衛門

沢水木(?) 松 柳 椿 伊吹 小羊歯 石路 水仙

著我 躑躅の紅葉(?)



初冬の立花。赤い実が小枝に集まっているのは梅擬ではなく、青膚、もしくは玉水木ではないかと思われる。右下の菊に見える花は石路つわふきか。その上にのぞく紅葉した輪生葉がよく効いている。左後ろに垂れる柳と、右後ろから前へと出た松の対比が特徴的。



菊の生花

仙溪

花型 生花 真型

花材 菊（菊科）

花器 天女模様銅花瓶

「聖人君子」とか「君子危うきに近寄らず」の君子は、中国での理想的人格の象徴の名だ。清らかで高潔、学識と人格に優れた人。高い徳があり人々の模範となる人のことだ。

その君子のつく言葉に「四君子」がある。君子に匹敵する植物を春夏秋冬から一つずつ選んだもので、蘭、竹、菊、梅の四つを四君子と呼ぶ。

この内の竹と梅と蘭（野生種）が簡単にいけることができないのに対して、菊はとても身近な花材だ。秋には様々な園芸種の菊をいけることができるが、育てる人がいて、活けて楽しむ人がいる、大変豊かな文化だなとしみじみ感じている。

さて、菊の古典花となると、どんな菊でもいい訳ではない。生花には撓めに耐えられる粘り強さと葉の良い品種。立花には倒して育てたものが必要だ。

そして古典であれ現代であれ、菊を自然調に活ける時には、君子の品格が感じられるように心がけたい。



洋花の生花

仙溪

花型 生花 株分け
花材 ピンククッション

(ヤマモガシ科)

クルクマ (生薑科)

花器 練込陶水盤

夏から初秋の、花が保たない時季にも、いけて長く楽しめる生花の作例。

ピンククッションもクルクマも、一種だけではなにか物足りないが、このように水盤に株分けで活けると、動きや潤い、色彩を互いに補い合ってくれる。

クルクマは10月頃まで切り花が売られているし、ピンククッションも手に入りやすい。一度活けてみて、その面白さを実感し、来年以降の夏の作例として覚えておこう。



羽ばたく

仙溪

花材 アレカ椰子(椰子科)

グラジオラス(菖蒲科)

モカラ(蘭科)

花器 鱗紋陶コンポート

9月はじめに稽古でいけた花。アレカヤシは夏の花材というイメージがあるが、作例のようにとり合わせる花色によって、秋のいけばなにもなる。

作例ではアレカヤシを背中合わせに立ててみたが、あたかも鳳凰が羽ばたくような造形美が生まれた。そこに赤いグラジオラスを中央に、オレンジ色のモカラを低く集め、アレカヤシと調和するようにいけている。

アレカヤシには大小があるので、このような姿にいけない時は、大きめで、軸の丈夫なものを求めたい。



横から見た奥行き



オモチャメロン
ククミス

仙溪

花材 オンシジウム（蘭科）

木苺（薔薇科）

オモチャメロン（瓜科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

このイガイガの実はアフリカ原産で瓜科・胡瓜属の蔓性植物、ククミスの一品種である。花屋には縞模様のあるものなど、数種類のククミスが、オモチャメロンの名前で売られていた。

一つの種類を2個買い求め、実の軸に針金をつけてキイチゴの茎にぶら下げると、自然な感じでいけばなに取り込める。

ククミスが目立つように、シンブルにオンシジウムだけを加えた。キイチゴが紅葉していれば秋らしいいけばなになるなど想像しながら、敷物で季節感を補った。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
10 月号
No.664

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ハンギングヘリコニア

△表紙の花▽ 桜子

花材 ハンギングヘリコニア

(茜蕉科)

トルコ桔梗2種(桔梗科)

花器 陶コンポート(柳原睦夫作)

固い茎から花が長く釣り下がるハンギングヘリコニア。ピンク色した苞は折れやすいが、花茎は強くしなやか。茎を切るとバナナの良い香りがして、パショウの仲間の植物である事を感じさせてくれる。柳原睦夫さんのポップで艶やかな花器に良く似合う。

横から見た奥行き



スズバラ

△2頁の花▽ 桜子

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

丸葉の木(満作科)

二輪菊2種(菊科)

花器 陶花器(小川欣二作)

スズバラという名前で流通しているバラの枝。お稽古花にも使える



くらい沢山切り枝として出荷されるが、正式な名前では呼ばれない。バラ科の常緑低木のロサ・グライウカ。葉も花も付かない姿なので、出来れば秋らしい彩りの葉を添えたい。

横から見た奥行き



菊の季節がやってきた

△3頁の花△ 仙溪

花材 糸菊3種(菊科)

白菊(菊科)

スプレー菊4種(菊科)

花器 陶水盤

菊は中国で生まれ古く日本に渡ってきた花だが、その後さまざまな品種が日本で生まれ、今では世界各地で新品種が生まれている。冬に向かって多くの植物が眠りにつこうとする時に、色鮮やかな花を私達に見せてくれる菊。数種類の菊を集めて、菊の季節がやってきたことを喜びたい。



珊瑚樹
さんごじゆ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 珊瑚樹（木犀科）

菊2種（菊科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

サンゴジュはスイカズラ科、ガマズミ属の常緑高木で、日本から東南アジアにかけての温帯～亜熱帯に自生する。燃えにくいため防火樹として庭木や生垣に用いられている。白い小花が集まって咲いたあとで黒く熟して落下する。

常緑樹なので艶のある濃い緑の葉が密生している。綺麗な葉を残して少し整理し、赤い実が目立つようにした。かなり重みがあるので安定のいい花器に投げ入れ、純白と薄紅色の洋菊を加えて、明るく現代的な雰囲気にとめている。

横から見た奥行き



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ⑤0

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

きすげ

祝言。中より水ぎわまで。

一名、金萱花。

姫萱草ひめかんぞう

祝言。中より水ぎわまで。

石竹せきちく

祝言。前置の少し上より水ぎわに用いる。

異名、瞿麦くはく。千葉なるを洛陽草なでしこといい、万葉なるを四時草という。

和名、日暮し草。袖むれ草。

古歌

から国に有けることはいさしらすあつま
のおくに生る石竹

薊あざみ

非祝言。水ぎわ

異名、千針草せんしんそう。姫あざみ。

はりのなきをいう薊あざみと眉まゆと二草二名か
未だ考えず。

第四十七図

立花 松除真

桔梗屋平右衛門

松 杜若 芍薬

薄 柘植 躑躅

要 小菊



綽約Ⅱ姿がしなやかで優しいさま。

花菖蒲

祝言。上中に使う時は水ぎわまで下げる。

異名、白昌。はくしょう。水宿。

和名、吹喜草。ふきく。

万葉集

大内や玉の軒ふくふきく草おほくの千世
にひかれてやこん

花遣い葉つかい杜若に同前。

芍薬

祝言。上中。

本草綱目に云う、芍薬は綽約、猶花の形綽
約より以て名となす。又牡丹を花王と云い、
芍薬を花相と云う。(花相は摂政関白の位な
り)

順和名、衣比須久須里。えびすぐすり。ふかみ草。はつか草。
かほよ草

芍薬は花の色おおき物ゆえ取りまぜ遣いて
苦しからずといえど、今様これを用いず。白
き花は白き花、紅は紅とその種をえらび三色
にても五色にても、縁つづきありありと混乱

せざるように立てるを吉とす。

芍薬を立てる時はやわらかなる心を用うべ
し。芍薬美花なるゆえ、ふとくいやしきは不
相応にて見悪なり。

第四十八図

立花 松除真

大坂屋五郎左衛門

松 晒木 芍薬 柏 栢植 要 小菊

杜若 薄



芍薬の葉、古代はしげく付けて立てるを本意とす。然るに近代は大輪なる花多く用いるを規模とするゆえ、おのづから葉つかい薄し。ただし一方あつくは一方うすく景気よろしく立つべきなり。

花のうつむきたるを遣うとも、葉は出生のごとく天をうけさせて遣う時は死花にあらず。

芍薬水ぎわまで下らずといえども、残花になりては控枝のあたりまでも苦しからず。諸花^{しよか}残^{ざん}になりては短く咲くゆえなり。

芍薬みじかきを高く遣う時は、筒をこしらえ遣うべきなり。又芍薬遠方より求め来たらば、根をやき箱に入るべし。すこししほるとも水に入ればものとのごとくなり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第二巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

規模Ⅱ手本。



「立花時勢粧 下 秘曲の図」に「草花」の立花図がある（第九十五図）。春の訪れと共にいつの間にか草が顔を出している。茎を伸ばし葉を広げ花を咲かせる。そんな草花の生命力を感じる立花図で、彩りの要に2種の芍薬が生き生きと描かれている。

第九十五図

立花 芦除真

草花 僧光清

芦 薄 百合

紫苑 著我

芍薬 杜若 小菊 熊笹

【記録】

京都文化力プロジェクト
KYOTOアート6
芸術めぐり・いけばな展

会期 9月22日(土)～24日(月)
会場 市民交流プラザふくちやま
出品 桑原仙溪 (写真①)



いけばな、工芸、写真、書、彫刻、
日本画の6つのジャンルの優れた
作品を紹介するイベント。

書道家の白井進先生がライブで
「風」の字を書かれ、その前に即興
で花をいけた。他流の先生方の花
にも心地よい風が吹いていた。

世界竹の日記念
竹に触れ、竹を知る

会期 9月17日(月)
会場 京都新聞文化ホール
挿花 桑原仙溪 (写真②)
9月18日は世界竹の日だそう。
それを記念してイベントが開催さ



れ、親子竹籠づくり教室や「日本人
の暮らしと竹」をテーマにした講演
会、篠笛の演奏、竹の種類や竹製品
の紹介などがあつた。
水盤に孟宗竹を立て、紅葉した七
竈、赤と橙の鶏頭、鳥兜をいけた。



ヒオウギとボンベイケイトウ

〈表紙の花〉 桜子

花材 ボンベイ鶏頭(けいとう) (鳶科)

檜扇の実(ひおうぎ) (菖蒲科)

ドラセナ・コルデイレネ

花器 陶鉢

ヒオウギは秋になるととぼけた様な形の実になる。祇園祭に飾る優雅な姿からは想像できない程に。花の頃は真竜、黄竜という名の品種が揃うが、実は射干玉(ヌバタマ)と呼ばれるので、つい黒砂糖味の丸くて甘い和菓子を連想してしまう。

取り合わせも花の頃とはガラリと変わり、実になると秋に咲く可愛いネリネを添えたりするのも楽しい。

インドの種を日本で蒔いて育てたボンベイケイトウも数年前から出てきた新品種。どちらも万葉の時代から歌に読まれた知り合い同士だが、初めて一緒にいけてみた。

横から見た奥行き





藪山査子やぶさんざし

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 藪山査子(雪の下科)

花器 螺鈿漆塗り花器

ヤブサンザシのいい枝に出合ったので、自然のままの姿を生かして生花にいった。

ユキノシタ科もしくはスグリ科スグリ属の落葉低木。雌雄異株で春に黄緑色の花が咲き、秋に実が赤熟する。野性味のある花材である。

横から見た奥行き



七竈ななかまど

△11頁の花▽ 仙溪

花材 七竈(薔薇科)

竜胆(竜胆科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花器(宇野仁松作)

信州の高山では9月中頃からナナカマドが少しずつ色付き始める。緑



色から赤色へ染まってゆき、色とりどりの錦の織物にたとえられるような錦秋を迎える。

そんな季節の色彩を、山へ行かずして味わうことが出来ることに感謝せずにはいられない。いけばなは目で味わうご馳走なんだと思う。

ナナカマドの優しい色付きに赤紫色のリンドウをとり合わせて同系の花瓶にいけ、スプレーギクの黄色で減り張りをつけた。

横から見た奥行き



レモンだより

父の誕生日に咲いてくれたいた白花の彼岸花。今年は5本咲きました。





出逢い花（33） 仙溪

キングプロテア（ヤマモガシ科）

グレビレア（ヤマモガシ科）

花器 黒釉花器

前号では4種類のヤマモガシ科植物をいけているが、今回また違うヤマモガシ科の花を2種出逢わせてみた。

ヤマモガシ科の植物は南米、南アフリカ、インド、オーストラリア、ニュージーランドなどに分布している。これらはかつてゴンドワナという大陸として繋がっていた地域だ。

この科にはプロテア、バンクシア、マカダミアなど60属以上、約二千種の植物が含まれるそうだ。原産地域では身近な自然として親しまれ、文化の背景にもなっているのだろう。そんなことを考えながらいけた。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
10 月号
No.676

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





秋色を楽しむ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 丸葉の木まるはのき (満作科)
鶏頭けいとう (寛科)

花器 陶花器 (竹内眞三郎作)

秋色の大きなケイトウ。丈夫な茎を長く生かして立ち姿を見せれば風格が感じられる。あるいは立てずに思い切つて短く前へ倒すことで花色を際立たせる生け方も面白い。

微妙に色の違うケイトウの赤色に、紅葉したマルバノキの葉色を重ねて秋色を楽しんだ。ススキの穂で季節感を深めている。

マルバノキは別名をベニマンサクと言ひ、晩秋に紐状の赤い五弁花を背中合わせに咲かせる。夏の緑の葉も清々しいが、カラフルな色彩に染まる秋はとりわけ美しい。鮮やかな自然の贈りものを存分に楽しませてもらった。

横から見た奥行き





へんてこなハロウィン 健一郎

花材 野茨（薔薇科） 木苺（薔薇科）

スプレー菊（菊科）

花器 ガラスコンポート

ハロウィンで花あそびをしようとしたが花を生ける時自然にある姿を生けようとするため、普段から慣れ親しんでいる自分にとって身近な和花を選んでしまう。可愛らしいガイコツとコウモリは手先の器用な知り合いにこさえてもらった。和風ハロウィンの花あそびになった。



籠にいける

〈表紙の花〉 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

吾亦紅（薔薇科）

鶏頭（苧科）

竜胆（竜胆科）

女郎花（女郎花科）

桔梗（桔梗科）

花器 煤竹肩付籠

籠にいけるときは軽やかにいけて籠の軽さと調和するように気をつけたい。

重みのある花や太い枝ものは避けること。

素朴な風合いの籠には、野山から摘み取ってきたような風情の花。微風を感じるような枝を選ぶといい。作例の籠は籠にしてはどっしりとしている。雪柳を低く前へ出して器の量感に見合う膨らみを作り、五種の秋草を一本ずつ加えている。雪柳の繊細な下がり枝で籠の強さが和らぎ、少ない本数でも器との視覚的なバランスがとれた。





木賊と秋海棠

△ 4 頁の花 ∨ 仙溪

花形 生花 二種挿し
花材 木賊 砥草 (木賊科)
秋海棠 (秋海棠科)
花器 かいらぎ釉水盤 (木村盛伸作)

トクサとシュウカイドウは相性がいいように思う。共に湿気を好むところも似ている。トクサに細い分かれ枝がついている場合、生花に付けるなら取り除いたほうがいい。

横から見た奥行き



レモンだより

朱塗りの円卓の下が好き。



東北一人旅

健一郎

釜^{かま}の温度を冷^やますのに、四日間の自由時間が私に与えられた。宮城県^{みやぎけん}の山奥で、急にできた暇は、私を自然に東北への旅に誘った。東北はその県も魅力的だが、宮城、岩手、青森の三県に絞^{しぼ}り観光をした。

「東北」と一纏^{ひとまと}めにして話す自分を見ると解像度の荒さが目立つが、初々しくてそれもいいと思う。東北に着くなり、私は自然の強さに圧倒された。東北に来る前に実際の自然（私の目的は苔^{こけ}）を見るべく家族で富士の樹海を見に行った。それはそれで圧巻だったわけだが、東北の自然は何かが違う。生命力に満ち溢れているのだ。人が少ないからだろうか。今までに見てきた自然とは明らかに異なり、そこに強い魅力を感じた。京都に住んでいると、東北に行くよりも北海道の方が近くに感じるほどに東北は遠い。なので、なかなか行く話が出ない。何を軸に生きているかにもよるが、その人の思考と感性において絶大な影響を及ぼすに違いない。少なくとも私の思考と感性を研ぎ澄まさせた。八甲田山、十和田湖、奥入瀬溪流。観光化されており人であつた返しているのに、それを感じさせなかった。人の介入が最小限なのだろうか。朝方に大雨が

降っていたからだろうか。神秘とも言える光景が目の前を覆った。

今から、「やってみなさい。」と言われると受け入れきれないが、縄文人の生活スタイルはなかなか豊かなものだったと思う。人間が自然と共に生し、自然を崇^{あが}め、感謝し、生活の中にも美を求めた。三内丸山遺跡^{さんないまるやま}の土偶、縄文土器からは美の意識が見てとれた。とても無い事だと思つた。食料の貯蔵も今ほど容易ではなかっただろうに。縄文人の先祖への畏敬の念は想像できても、生活の中に美を求める意識は俄かには信じ難い。縄文人の美に対する意識には畏れ入る。

V・オフチンニコフ著『日本人とはなにか』に、「日本人が宗教に対して希薄なのは美しいものに對する崇拜があるからだ」と述べられている。美に対する日本人の愛情は自然に對する愛情に根ざしているという。自分の国の自然を神として崇めているのも関係しているのだろうか。ロシア人に日本のことを教わるという、少し変わった本だが、日本の美意識について書かれたなかなか面白い本である。私は東北の旅を経て、自然と向き合う事は、美の起源と向き合う事であり、神を学ぶ事は古^{いにしえ}の先祖の解釈した自然を知ることだという解釈に至った。京都の市内

に住んでいると手の加えられすぎた人工物で溢れている。一部の人はそのことに嘆いている。それが故に人は人間自身が自然の一部だということ、忘れてしまっている気がしてならない。自然の中の人間が地球にある物質だけで高層ビル群をも創造した。傍観者ではなく、内部観察者としての自分を見つめ直してみることも大切なことかもしれない。



新しいピアス 健一郎

介護職につき思いもしていなかった能力がついてきていることに気づいた。気づく力だ。それも、意識していなかった事に気づく力だ。「アハ体験※」のようなものである。この能力を磨くと日々同じ利用者をつぶさに観察する事で、すぐに異変に気づき対応することが出来るのだ。この観察力は日常生活でも充分に生かすことが出来る。花と向き合っている時に今まで意識していなかった部分に目がいつたり、毎日歩く同じ道が歩いて楽しくなつたりする。家族に時々気付いたことを言ってみたりもする。「お母さんのそのピアス新しく買ったやろ！」と自信満々に聞くが、「もう10年前から持つてるわ！」時々外れる事もある。でも10年間意識していなかった母親の耳に目がいつているので、まあ、よしとし、めげてはいない。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む

⑥2

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

水仙花

祝言。上中下。

本草綱目に云う、この物卑湿ひしつのところによろし。水欠くべからず故に水仙と名づく。

異名、雪中花、玉玲瓏ぎょくれいろう。一重なるを金盞銀台花だいかと云う。千葉なるを真水仙と云う。

水仙は五二色いっしきのその一つなり。一色のみにかぎらず、常の立花にも一に水仙、二におもとと云い伝えて、最上の秘事なり。又水仙の座として瓶の中にさす所と指さぬ所とあり。葉遣い秘伝数多あまたあり。

水仙を正心に用い、あるいは中に遣うとも、葉は水際までさげて遣うべし。

水仙の一色、早咲きの時分ならば枯葉を立

つべからず。仲秋のころよりは一、二枚遣うべし。春になりては三、五枚にても苦しからず。祝言の花ならば枯葉遣うべからず。

水仙の葉、水際に長く遣う時は、葉のあつき勢いあるを竹をほそくけつり、なかば指し通して、二枚取り合わせ、葉先すこしちがえて、

第百六図

立花 水仙一色

水仙一色真 富春軒

水仙 金盞花 蒼莪



一度にためて遣うなり。針金を用いるべからず。

このごろの人の水仙を遣うを見るに、針金を指し通して葉先をまげ、あるいは小刀のむねをもつて、しごきて勢いあらせるを専らと好む。これ大いに出生の道理に背く。見ずや水仙の葉の幽美なることを。師の云う、水仙の葉つよくなづる時は、生得のつやうせて、自然の景気なしと云えり。誠に名人の教えありがたき事にこそ。

立花秘傳抄の三終

f f れている。「常の立花にも、一に水仙、二に万年青と云い伝えて最上の秘事なり」と書かれている。「水仙一色」の図が三つある。直真立花、株分砂物のそれぞれに自由奔放な水仙の姿が描かれている。これらは葉に針金を通して形作つたものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

一本ごとの水仙を見ると、行儀の悪い扱いがたい姿をしている。でもそういう姿こそ、雪に倒れ風に

翻弄されても葉を伸ばす自然本来の姿なのだ。富春軒はそういう自然を特に好んで立花を立てている。自然本来の姿を立花に生かす醍醐味を後世に伝えるために。

夫れ花は目を悦たのしますの事ことのみに非あらざるなり。又、あに氣を養うの謂いいなからんや。なかんずく、

第一百七図

立花 水仙一色

水仙 小菊 著我
桑原次郎兵衛



なかんずくーとりわけ

如かずーおよばない 恨むらくはー残念なことには

梓に鏤めるー版本に刻む

剗刷氏ー版本の彫り師

5年を要して立花時勢粧全八巻の内容を紹介してきた。八巻の最後には次の跋文がある。

貞享戊辰五月良日

洛陽後醫

西村氏義憤

立花時勢粧巻之八大尾

第百八図

二株砂物 水仙一色

水仙一色砂物 義憤（初版は桑原次郎兵衛）

水仙 小菊 露の臺 著我

へいか
瓶花の風雅たるや、遊賞なんぞこれに如かん。
ゆえ
故に世々これを伝えて、流派大いに漫れり。今
世洛下に富春軒仙溪という者あり。幼より今に
至るまで二十余年、花を嗜んで最も勉めたり。
この故に、諸流の奥儀を窮め、自然の花の妙を
探るなり。適、花をあつむるに当たつて、奇な
らずというもの無し。殆ど造化の手を仮るに似
たり。これに因つて、隣里郷党の影慕するもの、
その幾許ということを知らず。予また、その門
に入りて、これを効うこと已に久し、唯恨むら
くは未だ測り易からざるもののあることを。仙
やこの頃、編する所の書数巻、予をしてこれ
を見せしむ、その作たるや真画と妙解を与う。誠
に巻を出ずして花法を知るものか。因て梓に鏤
めんことを請う。仙曰く、この書、人のために
するにあらず、ただ平日の戯翫のみと。予、強
いて剗刷氏に命ず。謂うに予も亦、彼の花蹊に
満つと云うものと何ぞ異らんや。ただ願わくば、
この書長く朽ちざらんことを、ここに於いて書
す。





伊勢菊

／9頁の花／ 仙溪

花材 蔓梅擬（錦木科）
雪柳（薔薇科）

伊勢菊（菊科）

花器 陶花瓶

イセギクは花卉が繊細なのに印象は強烈だ。一緒にいける相手もそこそこの強さがないと釣り合わない。

「瑞風」の美を訪ねて

J R 西日本が運行するトワイライトエクスプレス瑞風。京都駅の瑞風ラウンジでは、京都ゆかりの文化人によるミニトークでお見送りをしている。櫻子副家元もメンバーの一人で、瑞風ホームページでも写真と文章を見る事ができる。是非のぞいてみて下さい。



祇園祭にいけないいけばな展

7/15～17 住友不動産フードホール7階（四条河原町）
桑原仙溪
夏櫨 檜扇 桔梗 松明花





ホオズキをかためる

△10頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿 (茄科)

カーネーション (撫子科)

花器 黒釉陶花器

ホオズキをかためてみた。ホオズキの軸を切り針金を刺したものを幾つも作っておき、束ねて棒にくくりつけている。白いカーネーションと対比させたいけげな。

朝の光の中で見ると、ホオズキの中に明かりが灯ったかのように優しく光っていた。



ローゼル

△11頁の花▽ 櫻子

花材 ローゼル (葵科)

リコリス・インカルナータ

(彼岸花科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 陶製スーポウル

ローゼルの花はオクラやワタの花に似るが、蕾もしくは実の状態で



収穫し、肥大した萼と苞がジャムやハーブティーに利用される。生で食べると酸味があるそうだ。ローゼルは西アフリカ原産で熱帯地方に分布する。日が短くなると咲く短日植物である。

リコリス・インカルナータは狸の剃刀とも呼ばれる中国原産のリコリスの原種の一つ。岡山の先生が庭から切ってきて下さった。

このアンティークのスーパボウルに秋色のアジサイがよく映る。自分の感覚を頼りに三種の花を取り合わせたが、うまく調和してくれた。



台風15号と消費税

今月から消費税が10%に上がるが、消費税に限らず税の集め方と使われ方は、弱者に優しく若者に活力を与えるようなものであってほしい。また、千葉県など台風15号が残した爪痕に対して国の十分な支援がなされますように。政治に携わる人には私利私欲ではなく誠実さを第一に考えて頂きたい。

仙溪



七竈の生花

ななかまど

健一郎

花型 生花 草型 副流し

花材 七竈（薔薇科）

花器 陶花瓶

七竈のお生花を竹筒ではなく陶器に生けた。このお生花は私の東北での夏休みを体現したものだ。

7回、竈（かまど）に入れても燃えつきないということから付けられたという説が流布している。この夏ある陶芸家さんのお手伝いで宮城県の七ヶ宿に行ってきた。登り窯で焼くというのだから行かないわけにはいかない。身体による体験は宝である。体験するためには時間と費用を要するため無差別に体験をすることは難しいので、人と話したり、本から得た知識で自分にとって必要な体験に目星をつけそこに飛び込む。つまり身をもって知る事である。器をひとつ作るためにこんなに薪の量が必要なのか。3日間火を絶やさないとほこういう事か。1200度の竈に薪を放り込むとはこういう事か。火・土・水・空気。なんて純粹で、美しいんだろう。その中でも火には特別な何かを感じた。電気釜に薪を割って放り込むだけで陶芸の事を少しでも分かったと得意げだった自分が急に恥ずかしくなってきた。花を生けるときに器への意識が強まった。

私の言葉が拙い事は差し引いても伝えきれないほどの濃い体験をしてきた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
10 月号
No.688

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





足で生ける

△表紙の花▽ 健一郎

花材 矢筈薄（稲科）

女郎花（女郎花科）

秋海棠（秋海棠科）

花器 陶花器

滝を見に行くと、シュウカイドウと出会う。小さな滝の時には出会わない。荘厳な滝の時のみに出会う。シュウカイドウさんがたくさんいらつしやる時は大きなどんなに大きな滝なのだろうと想像が膨らむ。日が当たりすぎず湿度の高い所が好きみたいだ。あまり水が多すぎる所も好まないようで、ピンク色の花が虫や私を惹きつける。

一つ一つの自然体験が足で花を生ける事につながっている。足が軽いうちに方々を見て回るつもりだ。

矢筈スキと女郎花、花器、バツク紙、自分の経験に基づいた世界観をある程度表現する事ができた。

横から見た奥行き





蜀黍 竜胆
もろこし りんどう

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 二種挿し
花材 蜀黍（稲科）
竜胆（竜胆科）
花器 飴色釉陶水盤

（2012年10月号より）
葉つきのモロコシ5本と竜胆4本の生花。こんなモロコシは最近お目にかかれない。



紫苑

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 真の花型
花材 紫苑（菊科）
花器 燻焼陶水盤（天野款一作）
（2008年10月号より）

紫苑の葉9枚と花3本の生花。花は真、胴、控に。初秋の花材として復活してほしい。





重陽の節供 ちようよう

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 真の花型

花材 菊(菊科)

花器 煤竹竹筒 すす竹

9月9日に京都市内のあるお寺で長寿祈願のため、菊の花とともに能が奉納されたのを見学してきた。

菊の季節には一ヶ月ほど早く、生の蕾の一輪菊と、立派な造花の糸菊が奉納されていた。

旧暦と新暦。生活していると食の違いが顕著に現れる。自然のサイクルの一部となり人間が生活を営んでいた時代を羨ましく思う。

写真の菊も蕾だったため、七本生けてもスッキリと入っている。これから始まる菊の季節を謳歌したい。





鈴バラ

△ 5 頁の花 △ 仙溪

花材

鈴薔薇の実 (薔薇科)

薔薇 (薔薇科)

スプレー薔薇 (薔薇科)

花器

陶花瓶

「スズバラ」は流通名で、昭和52年から北海道深川市の特産品として栽培、出荷されている。

ロサ・セティゲラ (北米原産)

ロサ・グラウカ (ヨーロッパ原産)

であるらしい。

ロサ・セティゲラは北米のネイティブ・ローズで、「大草原の宝石」とか「大草原のつるバラ」と呼ばれる野生のバラである。

ロサ・グラウカの葉は紫がかった灰色で、カラーリーフとしてガーデニングに人気がある。バラの原種の一つで、山岳地帯のワイルド・ローズだ。

大きく艶やかな赤い実を見ていると、野生の逞しさ、自然の雄大さを感じる。バラの実に2種類のバラを合わせた。



ロサ・グラウカ

出典: <https://www.hokkaido-life.info/rose20160618.html>



ロサ・セティゲラ

出典: <https://www.prairiemoon.com/rosa-setigera-illinois-rose-prairie-moon-nursery.html>



木大角豆

△ 6 頁の花 ∨ 仙溪

花材 秋桜 (菊科)

木大角豆 (凌霄花科)

花器 陶コンポート

近所の公園にキササゲの木がある。初夏に淡黄色の花を穂状につけ、秋に大きな葉が散ったあと、キササゲのような細長い実が冬の間ぶら下がっている。この実が裂けると中から綿毛の生えた種が風で飛んで行く。中国原産の落葉高木で、日本には古くに渡来している。
風に揺れるコスモスの優しい花色が、キササゲに寄り添う。



キササゲの花

出典 : <https://midori7614.exblog.jp/18171111/>



キササゲの実

出典 : <https://blog.goo.ne.jp/koizumi-masato/e/Oe7fefac6834ba77d85f79a71de44097>





ビキニーニョという唐辛子

△7頁の花▽ 櫻子

花材 丸葉の木(満作科)

ビキニーニョ(茄科)

蘭「グラマトフィラム」

(蘭科)

花器 角形陶花瓶

ブラジルから来たフルーティなトウガラシといわれる「ビキニーニョ」を八百屋さんでなく、花屋さんで見つけた。赤、橙色、黄色でプチトマトのような実が枝分かれしてぶら下がっている。ユニークで可愛い沢山のトウガラシを紅葉の丸葉の木と投入に。「グラマトフィラム」は夏から秋に咲く蘭の花。ほっそりと長く軽やかで、瑞々しい翡翠色が秋の実りに潤いを与えてくれる。

横から見た奥行き



#未来デザイン

文化の未来時評 #5 制御から尊敬へ

2020.08.28

Text by 西村勇哉

人よりはるかに長い歴史を持つ花。その花の生を生かす「いけばな」には何があるのか。花と人との関係から、見えてくるものは。



「THE KYOTO」

文化を知る。

世界を変える。

京都ならではの視点で、文化を知り、未来を考え、育てる。
メディア・サロン・クラウドファンディングを柱とする、文化・アートのプラットフォーム。

京都新聞社の新事業として、今年6月から始まったデジタル情報サイト「THE KYOTO」の取材を受け、いけばなへの思いをお話させていただきます。

「花と協力して、何か人をほっとさせる空間を作るのが、いけばなの究極の姿です。だからこそ、花を敬う気持ちがないいけばなは、僕はいいとは思わない。」

文化の力を未来に生かすためのユニークなサイトです。是非一度、覗いて見てください。

『THE KYOTO』

文化の未来時評 #5

制御から尊敬へ ↓

インタビュー協力

桑原仙溪



下のQRコードをスマホで読み取るとサイトに行けます。

掛け花

仙溪

花材 ベル鉄線2種

(金鳳花科)

花器 志野花入

(野中春清作)

9月2日に撮った玄関の掛け花。上向きに咲くピンク色と下向きに咲く濃い青紫色の

ベルテッセン。

器は志野の小さな壺だが、品があり形も優れていて、花たちを水切りして、無造作にすつと口に挿すと、それだけで自然の息吹が感じられる。いけた花が生き生きとしてくる不思議な翫だ。



ヒオウギの実とレモンちゃん。

鉢植の檜扇が7月から9月末まで咲き続け、実もできました。このあと漆黒の種「ぬばたま」ができるのが楽しみです。



花を飾る場所 仙溪

花材 糸芭蕉（芭蕉科）

モンステラ（里芋科）

アンズリウム（里芋科）

花器 ガラス鉢

私の家では仕事柄、常にとこかに花がいけてある。稽古の見本にいた花や「テキスト」の撮影でいた花がある時は、あちこちに花を飾っている。少し多すぎるかなと思っても、置き方を工夫して、稽古に來られた時にできるだけ見てもらえるようにしている。

下の写真はもとと茶室として建てられた部屋なのだが、本来の目的にはあまり使わないこともあり、朱塗りの大きな円卓を置いて常に花を飾っている。お客様には別の座敷にご案内するので、この部屋はほぼ花のための部屋になっている。

改めて考えると、なんと贅沢なことだろう。しかしゆったりとした空間だからこそ感じられるものもあるはずだ。花が居心地良く飾られていると、こちらの心も心地よい。シンブルなことだけれど、いけばなとはそんなものなんだと思う。

こまめに水を入れ替え、悪くなった花や葉を整理し、新鮮な花を加えると再び輝き出すから不思議だ。



古代インドの聖樹信仰

仙溪

仏教がインドからガンダーラ、中央アジア（敦煌）を経て中国へ伝わり、その後日本に来るまでに、ハス（蓮）に対するイメージがどのように変化してきたのかを知りたいと思った。

そうすれば仏前供花のルーツに辿り着き、花瓶に花を挿す行為のはじまりの一つを見つけれられるかもしれない。

そもそもインドでは植物に対してどんな思いがあったのだろう。

仏教が生まれた古代インドでは、まず樹木に対して特別な思いがあったようだ。

いったん葉を落として死んでも再び葉をつけて生き返るところに、神秘的な生命力、尽きることのない創造力を感じ取っていた。

そして繁殖力の旺盛な特定の樹木が聖樹とし

て崇拜された。

写真①は生命の樹「如意樹」を表す柱頭彫刻で、中インドのベールスナガルで発見された紀元前2世紀頃のもの。バンヤン樹（ベンガルボダイジュ）の枝から財布や果実、蓮などが垂れ下がる。願いのものを与えてくれる樹だ。

古代インドではもともと聖樹に対する民間信仰があり、人々が行っていた供養の仕方「焼香」「燃燈」「散華」「伎楽」などが、そのまま仏教においても引き継がれている。

さらに詳しく云えば、香・華・塗香・燃燈・幢幡・傘蓋・五指印（掌印）・音楽・右繞（右回り）などの供養法は、聖樹（の祠）に対して行っていたものが、舍利を納めた仏塔（ストウパ）に対しても同様に行われるようになった。

初期の仏教美術において釈迦の伝記を彫る時に、釈迦は釈迦の居場所である樹木で表現され

ていた（写真②）。釈迦の生涯と関係の深い聖樹で釈迦の存在を表すことで、誕生、成長、増殖、死滅、再生という生命の循環をつかさどる宇宙の真理を悟った釈迦と聖樹を重ねたのだろう。

仏教の根底に古代から続くインドの聖樹信仰があることは、今日の私達のいけばなとも深いところで繋がっている気がする。

聖樹の元では人も動物も植物も平等にその恵みを授かる。人は生きとし生けるものと共にあり、その長としての樹木を畏怖し尊ぶ心は、私達が花をいけるときにも持っていたと思う。

いつか、どこかで、古代インドの聖樹信仰に影響を受けて、植物に対する尊厳の心から、水の入った器に花を挿した僧侶がいたのかもしれない。

インド人の植物に対する思いに学ぶのも、今の私達にとって、大切なことではないかと思う。

①



カルカッタ・インド博物館入口の如意樹

出典：http://kosoken.blogspot.com/2015/01/blog-post_20.html

②



エーラパトラ竜王の礼拝

紀元前1世紀初 バールフット出土
インド博物館蔵

聖樹と台座で釈迦（ブッダ）を表している。

出典：https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_291-301_Tadashi-TANABE.pdf

『生きる』

健一郎

なんのために生きているのだろう。自分の意思で生まれてきたくても生まれたわけではない。社会の役に立ち生きる事が有意義な人生なのだろうか。人が生きる事に意味などなく、次へと命のバトンをつなぐ事が生き物として正しい事なのだろうか。

グループホームへ入るまでは社会の中の自分を意識し自分を鍛え、人に何かを伝える事が意味のある事だと思い込んでいた。

勘違いを恐れずに告白する。グループホームで働いて感じた事である。利用者が生きているのは家族の思いのおかげであると思っていた。今までお父さん、お母さんだった人が脳に障害を負い、姿形は同じだが変わってしまった、自分という存在から最も近い肉親を守る行為、社会的な観点から見れば義務であり、責任感がそうさせているとなんとも思っていた。

そして、人を死なす事ができない発達しすぎた現代医療について目を向けていた。利用者の存在が職員の雇用を生み、社会を刺激し生産活動を促しているが、利用者自身が主体

的に何かを生産することはない。

「私いつまで生きるんやろ？私もう充分、生かさせてもらってん」年齢的なこともあり死について日常的に考える利用者は多い。今まで自分の身の回りのことが当たり前にでき、子供を育てたほどの人が、少しずつできる事が減っていき、他人の助けなしに生活する事が難しくなることは、自尊心を大きく傷つける。自分の存在意義を何度も何度も考えるが、無くなった自信がそれを生み出しにくくさせているのかもしれない。なので介助中に「堪忍ね、こんな事までしてもらって。」とお話が

あれば、私は「順番ですよ。」と答えるようにしている。

一年同じ場所で過ごすうちに利用者として日々を過ごすうちに抱く感情に変化が私に現れ始めた。特別な感情を持つようになった。毎日そこに利用者の方がいる事が私を嬉しくさせたのだ。存在がこれ程ありがたく素敵なものだと感じられたことはない。人を素直に認める事ができたと同時に自分と人の間にあった境界線のようなものがなくなっていく感覚をした。きつかけは分からない。おそらくグループホームでの日々の積

み重ねがそうさせた事だけは確かである。

相手の存在を認める事ができると、自分の事も許せた。何故ならば相手への言葉の根底は自分への言葉と同じであるからだ。何もしていない、ただいるだけの自分を許す事ができた。相手に対してだけでなく自分に對しても「居てくれてありがとう。」ではなく「居てくれて在り難う。」自然とそんな気持ちが湧き出た。

人に価値を届ける事が人生の意義であると、自分の価値を社会の中に

しか見いだせずにいたのである。必死に価値のある自分になろうと自分を取り繕っている事に気がついた。例えば読書がそうである。興味はないが必要そうな本を買っても、それは私には必要ない。今、自分の本棚は自信のなさの現れではなく、趣味の現れだと自信を持って言う事ができる。

お弟子さんから「先生の生き甲斐はなんですか？」と質問を受けた。恥ずかしくて声を出すのに数秒かかったが自然と口から出た答えだ。「生きている事が生き甲斐です。」



今年の夏の自然体験。滝に打たれてみた。
衝動を大切に、したい事をする。 健一郎
(撮影：菜月)



鍋にいける

仙溪

花材 パンパスグラス（稲科）

竹似草（芥子科）

ダリア2種（菊科）

花器 ホーロー鍋（ルクルーゼ）

使ったあと汚れを落とせるなら、食器や鍋にも花をいけられる。このオレンジ色の鍋は家族団欒の象徴だ。秋らしい穂を2種類に、鮮やかな色のダリアをいけると、和やかな会話が聞こえてきそう。

料理といけばなは共通点が多い。どちらも自然からの恵みを扱うこと。その鮮度が大切なこと。素材を生かす技術が必要なこと。器との調和が大切なこと。季節を味わい、心を豊かにしてくれること。他にも色々ありそう。

では違いは何だろう。料理のように人の胃袋を心地よく満たすことはできないが、いけばなはいけている時も、いけた後も、花との対話が楽しめる。これから花の保ちが良くなっていく。いけた後の花との対話を楽しみたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
10 月号
No. 700

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





花守として

櫻子

ていただいた。

盧山寺源氏庭の東側には古くから桑原寺
慶流記念塔が建てられている。

楓の木と楠の木陰でいつもしっとりと苔
生す姿で私を迎えてくれる大きな石碑だ。
師範認証式や行事がある時にはこの記念
塔に献花するのは私の役割で、若い時から
ずっと花をいけてきた。

白い小花を穂の様に咲かせるサラシナ
シヨウマは初秋の山や高原に行かないと
中々出会えない。

そんな貴重で珍しい花を秋の七草と取り
合わせた。

白銀彩の花瓶を選んで、いつものように
掃除をして水を打ち、静かにいけて飾らせ



源氏邸に生ける

健一郎

源氏邸を背景に秋の始まりを予感さ
せる砂物を立てた。

夏にお庭を拝見した時には一面に白
砂と苔が広がり、紫式部に因んで、紫
色の桔梗が咲いていた。意識したわけ
ではないが、童胆、鳥兜、桔梗が入っ
ている。撮影させてもらったこの場所
で、今年の夏は桔梗を眺め、気が休まっ
た事を覚えている。今庭は秋色に色づ
き初めている。

お庭を背景に撮ると作品に広がり
もたらされ、想像が膨らむ。大変、貴
重な経験をさせてもらった。砂と水の
関係、庭と立花には何か大きな共通項



があるのかもしれない。近いものを感じ
た。砂ってなんだろう。



感謝の心で

仙溪

昭和4年、12世家元の13回忌を廬山寺で行い、13世と門人による「桑原富春軒塔」を境内に建立、以後当流の師範誓約式はこの記念塔の前でする事となり今日に至っている。

縁の廬山寺で「テキスト700号記念誌」の撮影を希望し、町田泰宣管長のご快諾を得た。

本堂の弥陀三尊は、臨終の際に浄土から迎えに來られた阿弥陀如来、觀音菩薩、勢至菩薩の三尊仏で、今回特別に間近で優しいお顔立ちを拝めて感激である。

御前に立花を供えようと「益々精進せよ」と励ましていただけただけ気がする。



この銅器は13世が職人に作らせたもので、笛を吹き舞を踊る天女が表裏に彫られている。インド原産の鶏頭と草花を主にした供花で三尊仏に喜んでもらえたら幸いである。



草花立花

△4頁の花▽

仙溪

花型 直真立花
花材 鶏頭(莧科)

通草(通草科)

男郎花(女郎花科)

菊2種(菊科)

金水引(薔薇科)

花器 天女紋金赤漆銅花瓶

秋草の投入

△2頁の花▽

櫻子

花材 薄(稲科)

更科升麻(金鳳花科)

女郎花(女郎花科)

柳葉田村草(菊科)

花器 銀彩陶花器(寺池静人作)

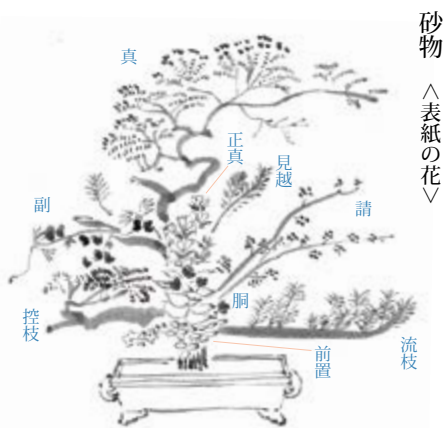
砂物

△表紙の花▽ 健一郎

花型 砂物

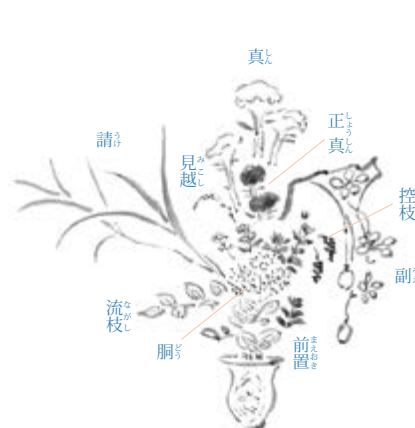
朝鮮槇(大槲科)

青肌の実(繡の木科)



砂物

△表紙の花▽



草花立花

△4頁の花▽

花器 銅砂鉢

山鳥兜(金鳳花科)

龍胆(龍胆科)

桔梗(桔梗科)

杜鵑草(百合科)

環珞躑躅(躑躅科)



藪山査子

△6頁の花▽ 仙溪

花材 藪山査子(酸塊科)
糸菊(菊科)

花器 陶花器

10月11月頃、ヤブサンザシの実が赤く色づく。秋のいけばなに自然な味わいを与えてくれる大切な花材だ。秋色に染まった小ぶりの葉と色づきかけた実。ごつごつとした枝。細枝の先には次の年の芽ができている。束を解くと意外なほど枝の広がりがあったりして、毎回どんな枝姿なのかワクワクしながらいけている。

相手には菊がいい。花屋には様々な色や形の菊が仕入の度に入れ変わり並んでいる。今回は藤色の糸菊を選んでさっぱりと2種でいけた。



ブルーベリー

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 ブルーベリー(躑躅科)

花器 獣耳陶花器

葉が紅葉したブルーベリーの枝。暴れた味のある枝だったので生花にいけてみた。型に納めるのに苦労したが、ブルーベリーの野性味を感じることができた。

アメリカ北東部にイギリス人が住み始めた頃、その厳しい気候のため持ち込んだ農作物は育たず飢えて苦しんだそうだ。それを救ったのはトウモロコシの育て方や野生植物の採取や保存法などの先住民インディアンに教わった知恵で、中でも重要だったのが広範囲に自生していたブルーベリーだった。実はもちろんのこと葉や根を煎じたお茶も愛飲された。

ブルーベリーの実が夏の間に熟すのは知っていたが、その後こんなふうに葉が色づくとは知らなかった。いけばなは植物を知る入口の一つである。



↑ 銅器に彫られた天女の図。
← 挿花春秋 18号に同じ天女図が。

金赤漆銅花瓶 へ4頁の器
13世の時代、「テキスト」の前には「龍膽（昭和11）」「挿花春秋（昭和24）」が発行されていた。挿花春秋13号に家元が天女を彫刻した銅器をデザインしたことが書かれている。伝統を現代に生かすことを考え、試作を重ねてできた2つと無い貴重な器である。

大津市いけばな芸術展

会期 11月6日(土)～7日(日)
会場 大津市生涯学習センター

国民文化祭わかやま2021
きのくに花回廊
いけばなでつなぐ文化の和
会期 11月13日(土)～14日(日)
会場 和歌山城ホール
出品 桑原仙溪
日本いけばな芸術協会理事として賛助出品します。

秋満腹

△8頁の花▽ 健一郎

花材 メラレウカ (薄桃科)
菊4種 (菊科)

花器 陶花器

毎年この時期になると菊が盛りを迎える。通年で菊を見かけるがこの時期まで生けるのをできるだけ我慢している。お腹をすかした後のご飯は本当に美味しい。ご飯前にはどれだけお腹が空いていようともおやつは食べない。一口食べると体が吸収していく様子がわかるよう。同じく、一年我慢して生けた菊は体に深く染み入る。一緒に取り合わせたのはメラレウカ。ティーツリーとも呼ばれ、お茶としても飲むことがある。擦ると柑橘系のいい匂いがする。アポリジニが葉の殺菌力を利用して万能薬として使っていたそうである。匂いから想像できるような綺麗な色が菊とよく合う。





色づいた木苺

△9頁の花▽ 仙溪

花材 木苺の紅葉（薔薇科）

槍鶏頭（算科）

スプレー菊（菊科）

花器 陶花器

昨年10月末の宅配稽古の見本花。東京と名古屋の教室はコロナウィルスの影響で京都からそれぞれのお宅へ花を届けての自宅稽古が続いている。キイチゴの艶のある葉の色づきに季節を楽しんでいた。数年前から出回るようになったキイチゴの紅葉は、少し高がつくが季節の味わいを感じられるし、花材の状態にもよるが良く保ってくれる。

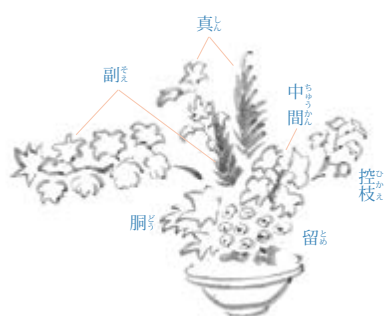
季節を感じる花材はまさにご馳走だと思ふ。大切に育てられ、大事に届けられた花たち。器を考え、取り合わせを工夫し、丁



寧に大切に付けてあげてほしい。花たちの良い表情を引き出せばそれで充分なのだ。

大切なのは良い花材との出会いをご馳走と感ずることだと思ふ。自分がそう思わないのに見る人に伝わるはずがない。

ご馳走に感謝である。



レモンちゃんと白い彼岸花。今年は9本も咲きました。



立花時勢粧333年

仙溪

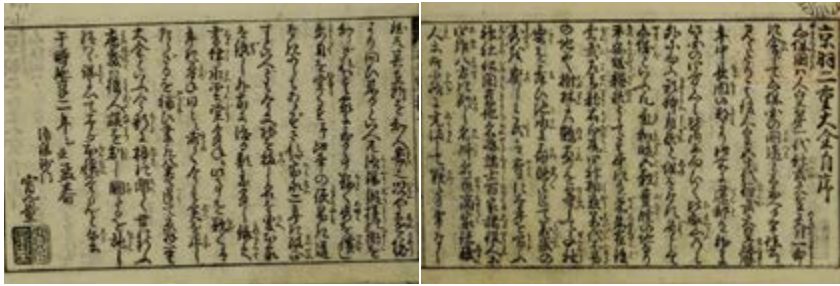
江戸時代前期の1688年（貞享5年・元禄元年）に桑原富春軒仙溪の『立華時勢粧』が木版刷りで出版されて今年で丁度333年になる。

118の絵図からなる『立花時勢粧3巻』と、花材の解説から始まる立花の手引き書『立花秘傳抄5巻』の合わせて8冊からなる花伝書である。

以前の「テキスト」でその膨大な内容を5年半にわたり紹介したが、一つとして同じものの無い絵図には植物の個性と息吹が見て取れ、また様々な故事や書物を引きながらの手引き書は、流祖の豊富な知識を感じると共に、揺るぎない花道理念が伝わってくる。

植物を見つめその生命を尊重し、自然の妙を花と共につくる

1685年の初版以降何度も改正版が出ていて、時代順に見ると流派が増えていく様子がある。

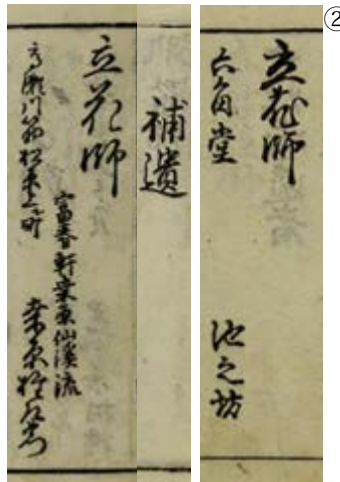
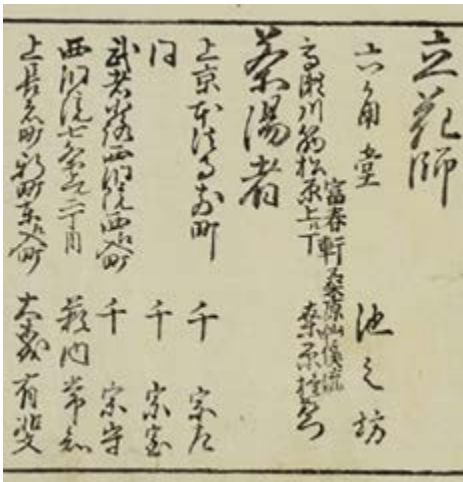


『改正増補・京羽二重大全8巻』延享2年（1745）の巻1序文。

『京羽二重』は京都の実用的な地誌・観光案内で「諸師諸芸」の項目に茶湯者などと共に立花師も紹介されている。

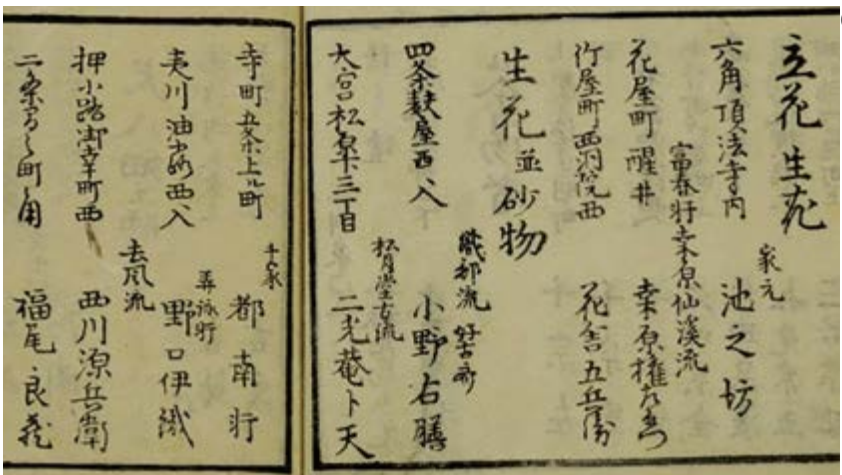
初版（貞享2年（1685））では立花師は「池之坊」と「大住院」だったのが、60年後の改正版（①②）では「池之坊」に「富春軒桑原仙溪流」が加えられている。

出展①②③④：京都府立総合資料館所蔵（ARC 古典籍ポータルデータベース）
<https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f3=京羽二重>



『明和新增・京羽二重大全 巻の三』
 明和5年（1768）の部分。
 延享版に続き「立花師」として池之坊と当流が紹介され、続いて「茶湯者」5人の名があり当時の様子が偲ばれる。

『改正増補・京羽二重大全 巻の三』
 延享2年（1745）の部分。
 出版間際に富春軒桑原仙溪流が加えられている。5世家元の頃か。



『文化増補・京羽二重大全 巻の三』文化7年（1810）の部分
 「立花 生花」「生花 並 砂物」に9人を紹介。

『勘違いと見立て』

健一郎

勘が違っている事、物事を間違っていると思ひ込むことである。山の中で捨てられていたゴミが花に見えたりする。見間違いだ。山の中に花を探しに行っているのだから色が目についてしまう。そのたびに残念な気持ちになる。花は誰かに気づいてもらいたくて色をつける。それは虫かもしれないし、鳥かもしれない。あるいは人間であるとも思う。そしてお菓子の袋もまた人を選ばれたくて色をつけている。山を歩きながら、勝手に期待して勝手に間違え、残念な気持ちになった。ただそこにゴミが落ちていただけなのに。

レビー小体型認知症は幻視を伴うことがある。レビー小体型に限らず、認知機能が低下すると少しずつ勘違いをすることが増えてくる。よくよく話を聞いてみると、幻聴、幻視にはきつかけがあることに気がついた。火のないところに煙はたたないらしい。幻視、幻聴は見間違い、聞き間違いなのかもしれないと

考えている。マスクに赤い絵の具がついていたら「鼻血出てるで！」と心配したり、「屋根の上を人が歩いている！危ない！」と訴えがあるので見てみると鳥が歩いていた、時には屋根を修理する人が歩いていたなんてこともあった。「あそこで男の人がずっと見てきはる」と不安そうな顔で相談された場所をみると確かに少し影ができていて不気味な雰囲気があるようにも見える。幻視に分類されるのは最後の例だけだと思うが、いずれも認知機能の低下による勘違いである。そして物事を感じとるセンサーの感度が増加しているように思う。不安がそうさせているのかは分からないが、何かを感じ取る感度は確実に高い。そして言葉から解放されているようにも思える。

道端での他者の話に耳を立ててみると、それぞれが話したいことを話していて、お互いに違う話なのだがお互いが満足そうにしている光景をよくみる。グループホームでも見かける。お互いに笑いながら話したいことを話せるだけでいいのかもしれない。

ない。

人の話を聞く時には、大抵、見当をつけて話を聞いているので、本当に話を聞いているのか怪しい。僕が勘違いをする時は話を適当にしか聞いていない時が多い。話を聞くと言うことは思いの外、難しい。それは聴こえる話に見当をつけてしまうからだ。見当をつけて聞くともはやそれは自分の話である。人の話は聞きたいようにしか聞けない。自分の知識と経験からの予測だ。会話を抽象化しある程度の数のパターンに分類してしまう。全く同じ経験をしたわけでもないのにすぐに分かった気になつてしまう。その人からされる話はその人特有の物であるのにもかかわらずだ。

弟から「満月やで」と写真が携帯に届いた。通りの街灯の明かりに続いて満月が配置されており、どれが月だかよく見ないと区別がつかなかった。写真で見ると月も街灯の明かりも見分けがつかない。目を騙すのは容易らしい。見間違いを誘発させる意図が見えた面白い写真

だった。エッシャーの騙し絵やトリックアートに分類される絵が好例だろう。

意識的に勘違いをする変わった見立てという文化。日本庭園は石だけで水を表現したり、擬音語やごっこ遊びも見立てがあつてこそである。花で言えば、花の色と葉の形から付けられた雪柳が真つ先に思い浮かぶ。他にも女郎花、擬宝珠など数多くある。見立ては想像力を大きく刺激する。

意識せず間違つて思い込むと「勘違い」意識して間違つて思い込むと「見立て」になる。

小学校6年生の頃、自分たちが一番偉いと思つていた。中学三年生の頃も威張つていた。高校三年になると他の中学生や小学生を見て自分にもあんな頃があつたんだと驚く。大きな勘違いがわかると一皮剥けた気がする。今も同じことを繰り返している。偉いと思つていた時は根拠はなかったが自信があつた。

今25歳になって自分の大きさ

が分かった気がする。そしてこれも勘違いなことも分かつている。まだ実感はしていないが。見える世界が少しずつ変わった。小学生の頃よりはいくらか、マシだろう。成長を求めてというよりは、好奇心が先行して、今もしたいことばかりしている。自分の前提や常識が大きく覆されたときの驚きと成長は大きい。何回もやり直すのだ。そして、おかしな影響を受けるような環境にはいたくない。早急に立ち去るような心がけている。食べたものが体を作っているのと同じで環境が自分を作っていると考えているからだ。

歳を取れば取るほど、その前提や常識は揺るぎないものになつてしまい、疑うことが難しくなるらしい。今までの自分の知見を疑うことが自己の否定だと勘違いするからだろうか。自分の常識が固まって安心できている時が一番危ないだろう。自分がこのまま歳を重ねる度にその都度疑いを持ち、勘違いを認める気概が必要なのだろうが、自分がどうなるかは分からない。



秋明菊

△12頁の花▽ 健一郎

花材 丸葉の木まるばのき（満作科）

秋明菊しゅうめいぎく（金鳳花科）

藤袴ふじばかま（菊科）

花器 黒釉陶花器

去年の10月中旬に貴船神社に行った。秋海棠に出迎えられ、奥にまで案内される。

秋明菊の数は多くなかったが、八重で薄紫色のもの、白の二重が植っていた。背丈は僕の肩ぐらいまであり勢いがあった。

秋明菊は「貴船菊」とも呼ばれており、昔は多く自生していたらしい。現地で見るとその植物の見え方が変わる。

貴船神社の醸す雰囲気は秋明菊や秋海棠がよくにあった場所だった。

紅葉した丸葉の木が大きく優しく受け止めてくれている。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
10 月号
No. 712

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





季節を味わう

△表紙の花△ 仙溪

花材 野茨のいばら（薔薇科）

糸菊きぎく（菊科）

木苺きいちじこ（薔薇科）

花器 陶水盤（市川博一作）

赤い実に紅葉した葉を合わせ
季節の花を覗かせる。この組み
あわせが気に入っている。いけ
あがった姿をあれこれと想像す
るのが楽しい。

その季節の自然の恵み、輝き
を感じる花をいけたい。



ホトトギス

△2頁の花△ 仙溪

花材 杜鵑草ほととぎす（百合科）

白花藤袴はなふたば（菊科）

小菊（菊科）

花器 陶水盤

風が涼しく感じられる頃、ホ
トトギスの花が咲きはじめる。



葉の脇に咲くものと、茎の先端に咲くものがあるが、後者なら伸びやかに軽やかに、葉と葉の隙間を見せていきたい。
赤と白の小花がホトトギスの花色に優しく寄り添っている。



深秋

△3頁の花▽ 健一郎

花材 乱れ菊3種（菊科）

嵯峨菊2種（菊科）

花器 陶花瓶

秋が深まると何と言っても菊が美しく感じられる。花屋でもさまざまな菊が迎えてくれる。乱れ菊は自然の勢いをそのままに生け、嵯峨菊は品良く生けた。その後、家元のアドバイスで枯れ葉の景色を作った。いい景色である。



葉蘭^{はらん} 九葉 生花 行型

葉蘭は中国原産の多年草。地下茎から1枚ずつ葉が出る。
最初は巻葉で伸び出てくる。巻葉の外側が内側よりも太陽光を多く受ける分、幅が広くなり、開いた葉では左右で幅が違う。右巻き左巻きの両方がある。
右の広い葉と左の広い葉、両方使うことで出生^{しゅっしょう}を表現する。
美しい姿形になるよう葉を選べば自ずと両方の葉が必要になる。
左右同数大中小の葉を多めに用意した中から葉を選んでいけすすめる。



新囲と見越はどちらを高くしても良い。



又木配りは小さめ
にかける。



葉にもよるが、一番大きな葉を真に選んで、
中程で茎をしごくように撓めておく。控・
胴沈みには小さい葉を残しておく。胴沈み
のかわりに副沈みでもよい。



① 副を左手前に入れる。
胴を副のうしろへ。



② 見越を胴のうしろに。



③ 胴沈みを胴のうしろに。
葉は胴のうしろへ。



④ 新囲を胴沈みのうしろへ。
真囲



⑤ 真をさらにうしろへ。



⑥ 横配りをかけて紐で水際を縛る。
総囲を手前へ。



⑦ 留を総囲のうしろへ。
留



⑧ 留を一番うしろへ。
控



⑨ 留の出口を慎重に撓めて
形を整える。

◎ いける順番や入れる場所はそのつど工夫する。横配りはしっかり強めにかける。



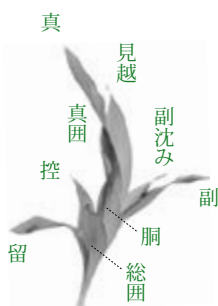
葉蘭九葉^{はらん}

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型
花材 葉蘭（百合科）
花器 煤竹竹筒^{すすたけ}

葉蘭は足元を切ることはあっても葉先を切ってはならない。葉の大小、葉のくせをよく選択してその組みあわせ方を工夫し、流麗な形を作りあげる。

葉の形は同じようで同じでない。それぞれに「くせ」があり、花形の中で用いる場所を考えるわけだが、なかなかこれが難しい。数多くいけて様々な葉の扱いに慣れ、形作のための技巧を身につける修練が必要となる。いろいろ工夫するうちに、自分なりのコツを掴める時がある。そんな積み重ねが葉蘭の生花には必要である。





木瓜^{ぼけ}の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花材 白木瓜（薔薇科^{ばら}）

花器 白竹筒

木瓜の枝ぶりは面白い。植わっているのを見た際の迫力とは大きな違いが出る。面白味のある枝が多すぎるため、どう魅力を引き出すか考えている時間がいい。枝取りをする際、留に配した枝を見た瞬間に花形が決まった。面白くしようとはしていない。面白い枝だったのだ。春と秋に木瓜は咲くが、鳥の食べ残した実が残っていることもある。もっとも、僕が鳥なら、棘だらけの木瓜に近づかないだろう。木瓜の棘が険しかったところに実があつたのだろうか。春と秋で生け分けることは難しいが、小さな秋を大きく表現できた。





きささげ
 楸の生花

△8頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 楸のうぜんかずら（凌霄花科）

梅花躑躅ばいかつじ（躑躅科）

花器 遊鐙耳銅花器

留の梅花躑躅で大きな動きが、楸の存在感を強くさせる。楸は撓め難く、水が上がるか心配していた。撮影して一週間後、新芽ができていたので問題無いだろう。その後ますます大きくなっている。



キササゲの枝から新芽がでてきた。



横から見た奥行。



秋草の立花

△9頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材

真 女郎花 (女郎花科)

見越 男郎花 (女郎花科)

副 梅花躑躅 (躑躅科)

請 吾亦紅 (薔薇科)

控枝 水引草 (蓼科)

正真 秋海棠 (秋海棠科)

胴 七竈 (薔薇科)

〃 秋明菊 (金鳳花科)

流枝 徳咲下野 (薔薇科)

前置 杜鵑草 (百合科)

老い 鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶花瓶

ゆったりとそれぞれの秋草の
魅力に浸るように立てた立花。
季節に溶ける感覚が気持ち良
い。



左斜め横から見たところ。

余計なお世話

健一郎

今僕が働いているグループホーム（認知症対応型共同生活介護）とは、共同生活を通して自立の支援を行い、充実した豊かな日々を送ってもらうことを理念とした介護施設である。食事の用意や片付け、洗濯や掃除といった日常生活に必要なことを各自で行い、どうしても行えない場合に職員の補助が入る。

しかし実際の生活では、利用者さんが何かを自分でやろうとすると先回りして職員のサポートが入ってしまう。こんなにつまらないことは無いだろう。やってくれることが本人の自立を奪っている。そこには自己肯定感や達成感を得られる余地はない。認知症の症状が出たことよって行動が制限され、挑戦することも止められて、何も自分でできないことよって自尊心が大きく傷つくこととなる。

大きな台風が近づいた日

だった。利用者さんが、「そろそろ帰ります。」と言って席を立った。なぜここに居るのか分からず早く家に帰りたいのだ。いつもなら職員は動揺するのだが、台風や大雨の日は違う。「外を見てください！今日は大変ですよ。よかつたらご飯を食べて泊まっていってください！」と上手に誘導することが出来る。その後利用者さんは「いいの？ありがとうございます。」と礼を述べる。定型化されたこのやりとりについてから違和感を覚えた。

にこやかに台風の情報を伝える職員を見てみると、どうしても帰りがたかったが帰ることができない利用者との温度差に疑問を抱いてしまう。

僕が働くグループホームではリスクというリスクは全て取り除かれ安全だ。しかし、職員の仕事は施設内での素人仕事の家事代行と転倒や怪我がないよう安全に何もなく1日を積み重ねることではない。自立の支援を行い、豊かな日々を送ってもらう事である。お互いが認め合い、共同で生活

をする関係が望ましい。

人はそれぞれがそれぞれの形で自立をしている。僕は家では伯母に食事をこきえてもらっているが、その食材は運ばれてきたものでそれは畑から・・・というように、自立は支えあつてこそ可能である。

認知症ケアは、お花を生けるのと似ている。僕がどうすればその対象が良い顔をするかを楽しんでいる。できるだけ、自分が良いと思う思い込みから離れ、その対象がどんな状態であるようにするにはどうすればいいか、そのことに集中するようにしている。その際に予測を超える反応が本物に感じられて、人が植物がより好きになる。といったことをどこで何をしていたも感じるようになってきている。器がどう思っているかもその一つである。花をいけた器が、料理を盛った器が良い表情を見せてくれると嬉しい。

守ってあげるといふ名目の

もと、人のやることを先回りしてしまうのはその人を信じていないことの裏返しである。それは相手にとって必要な支えでは無く、余計なお世話でしかない。人は誰でも生き生きと生きたいのに、まわりの環境がそうさせないことが多い。生き生きと生きるには互いの信頼が欠かせない。信頼し合う環境でこそ、生き生きとできると信じている。

管理は安心感を与えるが、そこでの生活は無機質で、守っている側のみいい気持ちでいるのでむしろその行動はエスカレートする。守る気持ちは時として対象の力を奪うことになる。

人は個人の単位でさまざまな障害を抱え、それぞれに支えを必要としている。あるときはお世話をし、あるときはお世話になつていく。お互いが生き生きと生きるには、生きる力を奪う「余計なお世話」ではなくて、生きる力を応援する者でありたい。

同

花伝書を見る

立花 りつか 梅擬除真 のきしん
除心の内草の花形

富春軒

梅擬 うめもじき 枇杷 びわ

菊 きく 小菊

熊笹 くまざさ 伊吹 いぶき 嫩葉 なは 檜木 ひのき

(立花時勢粧・上)

固定観念を払拭するかの
ように、ビワの葉3枚だけ

でさらりと胴をつくり、ウ
メモドキの軽やかさに対応
させている。更にクマザサ
の茂みが呼応する。

花材の選択と工夫の妙味。



富春軒



カラジウムの葉

△12頁の花▽ 桜子

花材 鶏頭けいとう（苺科）

カラジウム3種

（里芋科）

花器 陶鉢（アメリカ）

熱帯アメリカ原産のカラジウムは夏から秋に鉢植で手に入る。葉色や葉脈の表情が1枚ずつ違う。色の違う3種類のカラジウムで色と形に変化がつけられる。ケイトウと対等にいった。



立花研修会（健一郎先生指導）のケイトウの立花の前で。
レモンちゃん、はいポーズ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
10 月号
No. 724

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ハランの枯葉

△2頁の花▽ 仙溪

ペニセタム・パープル・マジエ

ステイ (稲科)

スプレー菊 (菊科)

葉蘭の枯葉 (百合科)

陶花瓶 (宇野仁松作)

出逢いから生まれるいけばなを
楽しもう。

暑さが緩むと庭のムクゲが二度目の盛期を迎える。毎日萎れた花を拾い集めているが、しゃがんで見ると繁みに隠れていた枯葉色に気付いた。ハランの枯葉だ。採り集めるとなかなかいい感じである。捨てずにおいたところ、相手に似合いそうな花材にも巡り会えて、このいけばなになった。

黒い穂はアフリカ原産の多年草をもとにアメリカで作られた園芸品種。強烈な個性をハランの枯葉が受け止めてくれている。





深紅のバラ

△ 3 頁の花 ▽ 櫻子

はしなみ
榛 (樺の木科)
ばら
薔薇 (薔薇科)
さかきく
嵯峨菊 (菊科)

陶花瓶

いい赤色だ。美しいバラは一本でも様になる。客間のテーブル中央に一輪挿しにするだけで、部屋の空気が生き生きしてくる。上下に切り分けて、下の葉も生かすようにしている。

床の間や壁際の棚の上なら、他の枝や花をとり合わせて伸びやかに。その時季の花材と一緒にいけることで季節を感じる花になるよう心がけている。

一輪の深紅のバラを主役にして、ハシバミと白いサガギクを加えると、秋らしい表情を見せてくれた。



意外な組み合わせ

△ 4 頁の花▽ 櫻子

丁字草 (夾竹桃科)
ちようじそう きようちくとう

五色唐辛子 (茄子科)
ごしきとうがらし なす

ケローネ・スピードリオン
けまのはぐさ

(胡麻の葉草科)

陶花瓶 (八木一夫作)

今年は夏の猛暑の為花材が高騰して種類も少なかった。9月後半に入ってきれいな糸菊や薄が出荷されるようになり、どれだけ生産者の方々が大変な夏を乗り越えられたのだらうと思う。

少ない花でも目を凝らして何か珍しいものがないかと探し思案した。五色トウガラシもカメレオンと言う名前で売られているのは今まで知らずにいた。ケローネ・スピードリオンはリンドウによく似ているが、全く違って花が次々咲いてくる。どちらも暑さに平気で逞しそうだつた。

少し黄葉したチョウジソウと合わせユニークな八木一夫さんの器に。





雪柳と寒菊

△ 5 頁の花 ∨ 仙溪

雪柳 (薔薇科)
ゆきやなぎ

寒菊 (菊科)
かんぎく

煤竹竹筒

昨年(しむね)の11月1日に撮影しているので少し早めの掲載だが、こんな生花(なまはな)をいけるのを心待ちにしていたきたく、早めに載せることにした。

カンギクは名前(な)が示すように、晩秋(ばんしゅう)から初冬(しとふ)に葉(は)が紅く色づく頃(ころ)の大変(たいへん)貴重な花材(はなざい)だったが、近頃(きんころ)はまだ葉(は)が青い時期(じき)から出回(でまわ)るようになった。当然(たうぜん)花の蕾(つぼみ)は硬(かた)くて小(こ)さいが、よく水もあがり、長く保(たも)つてくれるし、いけておくとだんだん葉(は)が色付(いろづ)いてくる。まだまだ手(て)に入る地域(ちいき)は限(かぎ)られるかもしれないが、作り手(つくりて)が増(ふ)えてくれることを願(ねが)う花材(はなざい)の一つだ。

カンギクは初冬(しとふ)に黄色(きいろ)い花(はな)がようやく咲(さ)くが、その可愛(かわい)しさは格別(かくべつ)である。それまですは秋(あき)を堪能(たんのう)しよう。





秋の七草 生花

△6頁の花▽ 健一郎

薄^{すすき}(稲科)

藤袴^{ふじばかま}(菊科)

葛^{くず}(豆科)

萩^{はぎ}(豆科)

女郎花^{おんながはな}(女郎花科)

桔梗^{ききょう}2種(桔梗科)

河原撫子^{かわらのなでしこ}(撫子科)

煤竹竹筒^{すすだけ}

13世、14世の家元がテキストでいけた秋の七草の生花を見てから、自分もいつか挑戦してみたいなと思っていた。何年か思っているけどその時は来るものである。秋の七草がタイミングよく一度に揃うことは難しく、三つのお花屋さんを訪ねて揃えた。お花屋さんで葛と萩さえ確保すればあとは運次第である。生け終わり、撮影の際に家元から副の萩の葉を残した方がいと助言を頂いた。時間をおいて見返すとその大切さがよく





分かった。毎月のテキストの撮影での指導は僕のいけばなにとって大切な時間である。皆様に育てていただいているなどよく感じている。これから変わらなく、のびのびと花を生けていきたい。

野^の竹^{だけ} 生花

△7頁の花▽ 健一郎

野竹（芹科）

陶扁平壺

野にあると気が付かないのだが、お花屋さんで見かけるとよく目立っていた。その姿形がどこか新鮮で他に何も取り合わず、お生花にした。切っているとセリ科独特のスツとする匂いがした。ある場所が変わるだけで印象は変わり存在感が増す。



中国の挿花

仙溪

中国にはどんな挿花の歴史があるのか。今に伝わる図像を見てみよう。

明の時代（1368～1644）はモンゴルの支配から脱し、漢民族によって中国が再び統一されて始まる。官僚・文人中心の文化が、広く一般民衆にまで広がっていった時代でもあった。

第十六代皇帝・熹宗（在位 1620～1627）はユニークで素晴らしい肖像画を描かせている。

絢爛たるデザイン（絨毯が敷かれ、玉座の両脇には豪華な朱塗りの卓に様々な贅を尽くした日常の道具が描か

れている。あちらこちらに皇帝の権力の象徴である龍が見え、これだけ多くの物を描いているにもかかわらず、全体は調和し、品格を感じさせる。

そして画面上段で一对の挿花が皇帝と並ぶ。花と器にはその人物の高い徳を象徴する役割があるのだろう。

拡大して見てみると、右側は装飾を凝らした紺色の花瓶（陶？ガラス？）に牡丹のように見えるバラの花が。左側には白梅と竹（の葉）に牡丹に見える椿（？）が挿してある。絵の中の皇帝に命を吹き込んでいたのか、なぜこれらの花が選ばれたのか、きつと深い意味があるに違いない。



「明の熹宗皇帝坐像」明代 台湾国立立故宮博物院
明代皇帝の肖像画の中でひととき異彩を放つ装飾性は精緻かつ豪華。

出典：<https://theme.npm.edu.tw/opendata/DigitalImageSets.aspx?sNo=04020370&Key=花^21^11&pageNo=26>



遠目では牡丹に見えるが、葉の形をよく見ると向かって右は薔薇で、左は萼の感じからして椿のようだ。バラは一種でいけられ、ツバキ（？）には白梅と竹の葉との三種でいけられている。いけ方は自然体だが洗練されている。皇帝が自らいけたものか、花をいけて飾る専門職があったのだろうか。

菊一色 立花

△表紙の花▽ 健一郎

菊・糸菊数種（菊科）

小菊数種（菊科）

乱れ菊数種（菊科）

寒菊（菊科）

銅立花瓶

満開に咲いた菊達。菊の葉だけのアしらいをしたりして景色を出すのもいいが、咲いた菊もやはりいいものである。程よく茎に動きのある菊を副と請に生けることができた。立花の動きの要である。真にかがりび菊を



生けているので正真は肥後系の菊を生けると華やかさが増す。できるだけの菊の種類を集め、景色に厚みをつくと重厚な立花になる。
請に力があるので左に流枝を出してバランスを整えた。



④ ノカンゾウは一日花だけど、毎日どれかが咲いてくれています。9月19日撮影。

④ 暑い日は網代の上が気持ちよかったです。





花伝書を見る

紅葉一色 砂の物

(富春軒…初版)

楓かえでしやれぼく 晒木こけかぶ 伊吹いぶき 柘植つげ

苔株

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

画面の右下、屈曲しながら力強く晒木がのびる。おそらく伊吹（柏榎）が風雨に晒されたものだろう。厳しい環境を感じさせる。

その晒木の白さが楓の赤い葉を際立たせている。

さりげなく存在感を発しているのが苔生した株である。彩色の具合にもよるが、この絵図の場合は切り株というよりも、苔生した岩のようにも見え、とても瑞々しい。苔は楓を育てる水を蓄えているかのような。

乾いた晒木と、苔に覆われた株の対照が、色づく楓の命の美しさを強めている。



同砂之物



サラシナシヨウマ

△12頁の花▽ 仙溪

更科升麻・晒菜升麻

（金鳳花科）

山芍薬（牡丹科）

大毛蓼（蓼科）

流木

陶変形深鉢

中央アルプス登山の起点、千
豊敷カールへはロープウェイで
行ける。その日本一標高の高い
駅に着くまで、様々な樹木の上
を飛ぶように移動するのだが、
木々の奥底に白い紐状のものが
点々と見えた。サラシナシヨウ
マだ。8月末頃であった。かな
りの高さからもそれと分かるほ
ど印象深い白い花穂。切り花で
は長くはもたないが、しばしの
間でもいけて、山の余韻を感じ
ていたい。ヤマシャクヤクとオ
オケタデのそれぞれの赤色が白
い花穂をより白く見せる。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

10 月号

No. 736

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





中国の「清供」が 日本の華道に影響？

仙溪

中国の插花文化に興味を持つてから、「清供」という言葉を知り、どのような概念なのか知リたかったので Chat GPT に質問してみた。ざっくり言うと、清らかで高尚なものを身の回りに置くことだそう。

そもそも文人や士大夫が精神的豊かさを求めて、自然や芸術を感じさせるものを自分に対して供える行為やその物を言う。

文人が「清供」という言葉を使い始めたのは明代（1368～1644）以降らしい。ひよっとすると、この概念が日本の供花を仏壇から生活の場へ移動させたのではないだろうか。

自分に供えるというのが日本人には分かりづらいけれど、中国ではしつくりくる表現なのだろう。插花も清供の一つとして文人に愛された。

私達が花をいけて部屋に飾るのも、まさに清供の文化と言っていると思う。花をいけることは自然との調和を追求していることでもある。そこには精神的な豊かさがある。



山茶花の生花

△2頁の花▽ 仙溪

山茶花（椿科）

銅花器

今年1月にいけた写真だが、サザンカの季節を前にして掲載する。あまり撓めずにいけたので、長く花を楽しめた。



横枝を立てて葉を見せる

△3頁の花▽ 仙溪

更紗灯台（躑躅科）

菊2種（菊科）

飴色釉陶花器

サラサドウダンの横枝を立てていけた。葉色を楽しむ特殊ないけ方。





八角蓮の実

健一郎

晒菜升麻(金鳳花科)
ハコグサ(目木科)

吾亦紅(薔薇科)
野紺菊(菊科)

船形辰砂釉花器(宇野仁松作)

八角蓮のほんのり色づいた葉と実を見つけ、感じた自分の気持ちを表そうと試みた。初夏に比べて、野の植物と合わせても良く見えそうであつたので、吾亦紅と野菊を取り合わせた。サラシナショウマと器の品格とが相まって、いい景色になっている。盛花でしか出せない景色になった。八角蓮の茎が弱っており、剣山のみで形が定まらず、枝に引っ掛ける形で生けている。深山の八角蓮、山地のサラシナショウマ、里の吾亦紅と野紺菊。秋のご馳走である。良い花と出逢えた。



秋草立花

健一郎

雁金草（紫蘇科） 真

着せ綿（紫蘇科） 見越

山程（茄子科） 正真

秋明菊（金鳳花科） 内副

水引草（蓼科） 請

竜胆（竜胆科） 流枝

菊（菊科） 葉のみ 控枝

杜鵑草（百合科） 胴ほか

桔梗（桔梗科） 前置

女郎花（女郎花科） あしらい

萩（豆科） あしらい

刷毛目花器（崔龍熙作）

虫から見た目線で植物と触れ合ったりする時間があるのだが、終介と方々に行くようになると、その時間がより濃密になった。いい遊び相手である。お花屋さんで季節の花を選んて、自分の感じたものを表し出しやすかったのが立花であった。



出逢い花

仙溪

紫式部むすめ部ぶ（熊葛科）
秋明菊しゅうめいぎく（金鳳花科）

刷毛目扁壺（八木一夫作）

切り枝でムラサキシキブと呼ばれているのは、その殆どがコムラサキで、紫色の実の付き方に間隔が開くのがムラサキシキブ、作例のように連続して付くのがコムラサキ。

そうと知っていても源氏物語の作者名で呼びたくなる。ちなみに漢名は紫珠だそう。

「雲ヶ畑・足谷人と自然の会」で山歩きをした時、沢沿いの道端に大きなムラサキシキブが生えていた。根元はかなりの太さがあったが、材は硬く、古くは極上の堅炭かたすみになったそう。

石化（帯化）したムラサキシキブは珍しい。シュウメイギクを添わせ、満月のような器にいた。久しぶりの出逢い花。





ミモザ・ブルーブッシュ

櫻子

ミモザ・ブルーブッシュ

(豆科)

ピンクッション

(ヤマモガシ科)

ダイヤモンドリリー

(彼岸花科)

トルコブルー陶花器

ミモザ（アカシア）・ブルーブッシュはオーストラリア原産で、春に黄色の花が咲く。

相手に選んだ花は2つとも南アフリカ原産なので、南半球の植物同士、ミモザとも相性が良さそうだ。

ダイヤモンドリリーはネリネの一種で、花卉の表面がキラキラと輝くのでこの名がついた。ピンクッションは裁縫で使う針山からの命名。

このミモザは初めていけたが猫の尻尾のようで優しい雰囲気。今後が楽しみな花材だ。



同行之花形 内副立

花伝書を見る

立花 松除真

「除真行の花形内副立」

中野小左衛門

松

菊

小菊

梅擬

晒木

粗檜

嫩葉

沢枯梗

(立花時勢粧・上)

門人の名があるが富春軒を強く感じる。一度下がった真の幹に対して、副も請も上る姿で対応。右に下がる梅擬と晒木は控枝だろう。自由な発想と絶妙なバランス感覚。



中野小左衛門

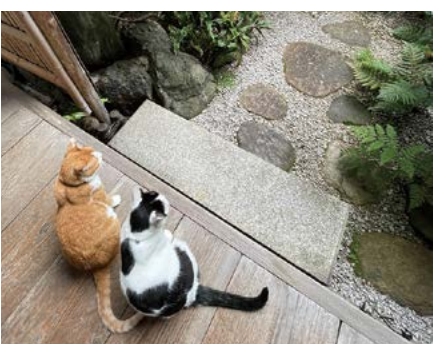
チャットジーピーティー

仙溪

以前紹介したインドやエジプトもそうだったが、台湾の故宮博物院が所蔵品をデジタル公開しているお陰で、居ながらにして過去の芸術を鑑賞することができるのは大変有り難いことだ。さらにそこに書かれた説明文を頼りに調べていると、異国の文化への理解も進む。

今回はじめて Chat GPT を使うことで、中国の「清供」という概念を理解することができた。おそらく中国のサイトからの知識に依るのだろう。

異国の文化を理解するためのツールとして活用されるといいなと思う。



葉つきの山帰来

△表紙の花▽ 櫻子

山帰来（百合科）
鶏頭3種（莧科）

布目陶花瓶（伊藤典哲作）

正式な名前はサルトリイバラだが、サンキライの方が呼び慣れている。若葉で包んだ山帰来餅のことが頭にあるからかもしれない。元来食いしん坊なのだ。晩秋の赤い実の頃もいいが、初秋の黄色い実と青い葉の頃にいけるのも好きだ。光沢のある葉と丸く集まった実。見ている



だけで山の自然に抱かれた気持ちになれる。

立派な枝だったので安定のある器を選び、別の太い幹にのせていけている。秋色のケイトウで、下がる実に立つ花を対比させた。





『曹大家授書図 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

金廷標（？～1767）は清代の画家。中国南部、浙江省湖州の人で、乾隆帝が南巡した折に才能を認められ宮廷画家となった。満州人の乾隆帝が、漢民族の故事や伝統文化を大切に絵に描かせたのには、どんな意味があったのだろう。書を授けろとする子どもの頭髪の結わえ方が他の子たちと違うのは何故だろう。

中国の挿花 ⑪

仙溪

今回紹介する二つの絵には多くの幼子が描かれている。中国絵画にはしばしば目出度い意味をもった植物や動物、器物とともに幼子が微笑ましい仕草で描かれる。幼子も目出度い宝だというメッセージが感じられて、見ていて心が和む。

小さな子どもが遊ぶ絵は『戲嬰図』『嬰戯図』と題されているので検索してみてもほしい。遊びや季節の行事の様子が描かれ、伝統的な生活文化を目で見ることが出来る。

『曹大家授書図』には6人の子どもが描かれ、そのうち年長2人が字を書く女性に対して畏まっている。

「班昭援筆授書」という故事に依ると故宮博物院の説明にあった。班昭という女性が筆をとり書を授ける場面。

班昭は後漢（25～200年）前期の著作家で、父も兄も歴史家であり、兄の班固が遺した未完の『漢書』を書き継いで完成させた。若くしてその才を認められ、宮中で後宮后妃に教える師範となり「曹大家」と呼ばれた人物である。（曹は早世した夫の姓）

絵の場面は清の時代に置き換えられているようだ。宮中の一室だろう。庭に白梅が咲き、南天の実が赤い。優雅な脚の高卓には寒牡丹の鉢。白磁の盤



『戲嬰図 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト 子どもの頭を見ると幾つかの違いがある。大人の髪形から推測すると清の時代を描いた絵だろう。他民族融和の願いがこめられているのではないだろうか。

に寿石と水仙で作られた盆景。竹籠に松や椿が盛られ、その横に火盆が見える。季節は冬だ。満月門の向こうで梅の木に吊るした爆竹に火をつけようとしている子どもがいる。中国の正月、春節を迎える準備の情景らしい。このあと「福」と書かれた赤い紙を戸口や部屋に貼って新年を迎えるのだろう。

『戲嬰図』には11人の子どもが描かれているが、楽器を持って演奏し、竹馬に跨がり勝負する様子からは、新年を迎えて楽しく遊ぶ賑やかで幸せな雰囲気伝わってくる。

庭の木々や建物のつくりが『曹大家授書図』と似ている。おそらくこれら二つの軸は新春前後の宮中を描いた対の絵ではないだろうか。年末の厳肅な緊張感と、新年を迎えた慶びと、その両方が鮮明に感じられる。

さて、どちらの絵にも挿花が描かれている。

先の絵では壁に貼られた絵の中。白瓷の花瓶に臘梅、椿、万年青の葉がいけられて、水仙と寿石の盆景、靈芝、柿の実が添えられている。

後の絵では机上の細首花瓶に紅梅、南天、松、椿がいけられ、同じく水仙と寿石の盆景が添えられている。

解説によれば、前者を瓶供図とし、

後者を「梅瓶に南天等が供えられている」と説明している。お供えであれば仏壇や祭壇を連想するが、調べてみると中国には「清供」という文化が古くからあって自分への供え物のようだ。

【清供】とは

中国の特に文人や士大夫階級の間で愛されてきた重要な概念で、精神的な豊かさを追求するために、日常の生活において清らかで高尚なものを（自分に）供える（身近に置く）行為やその物をさす。

供物は自然や芸術を感じさせる花、石、香木、盆栽、陶磁器などで、書や画、詩の創作およびその鑑賞も含まれる。

〈Chat GPT〉

暮らしの中で高尚なるものを身近に置いて精神の充足を願う、その一つに挿花があった。植物や物がそれぞれ象徴する意味に、豊かな暮らしへの願いを託していた。そうと知って中国の絵を見ると、理解が深まる気がする。

二つの絵は大昔の故事を清の時代背景で描き、掛け軸にして飾ることで、教育と伝統文化の大切さを伝えつつ、絵自体が清供としての役割を果たしたのだろう。中国人が花をいけ、絵に描いて飾った気持ちに、一歩近づけた気がする。



サラサドウダンの生花

更紗灯台（躑躅科）
さいわうとうだい

三彩釉陶大鉢（清水保孝作）

花屋ではドウダンツツジと聞いたが、大きな葉からしてサラサドウダンだと思う。紅葉しはじめた葉色と太い幹に一目ぼれして生花にいった。

普通サイズに収められず、かなり大型になったので、器も大きな鉢を選んだ。大きな蛇の目でいけている。厚みはないが存在感の強い生花になった。たっぷりの水と太い幹が自然の景色を感じさせる。

生花の真はやや前方へ出ながら弧を描き、梢が器の真上にもどるのが理想の形だ。そうすることで自ずと立体的な躍動感が生まれる。

サラサドウダンは日に日に葉色が変わっていった。目の保養。至福のご褒美である。

